DBR改

メジャー3.5m

【注意事項】

このＰＤＦファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にＰＤＦ化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でＰＤＦファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

悟空達が現在の力を持って過去に戻った。

そんなお話です。

ＤＢＲから再編集してます。

内容はかなり変えていくつもりですのでよろしければ最後までお付き合いお願いします。

目次

悟空、過去へ戻る ―― 1
エイジ761　10月12日 ―― 10
エイジ761　10月12日　その2 ―― 16
エイジ761　10月12日　その3 ―― 22
エイジ761　10月12日　その4 ―― 28
それぞれの修行　その1 ―― 35
それぞれの修行　その2 ―― 42
サイヤ人襲来！ ―― 49
悟空登場 ―― 57
悟空VSベジータ ―― 66
傍観する者たち ―― 73
惑星フリーザにて ―― 79
惑星フリーザにて　その2 ―― 85
カプセルコーポレーションにて ―― 91
地球での戦い ―― 98
地球での戦い2 ―― 103
地球での戦い3 ―― 110
ナメック星へ ―― 114
ナメック星その1 ―― 119
ナメック星その2 ―― 122
潜在能力解放 ―― 127
合流 ―― 134

怒るフリーザ！ ―― 140
親善試合 ―― 146
親善試合2 ―― 152
親善試合3 ―― 159

悟空、過去へ戻る

　力の大会が終わり、今日も孫悟空とベジータは破壊神ビルスの星で天使のウィスに稽古をつけてもらっていた。
「どうやら、力の大会以降身勝手の極意が発動する様子はないようですね。」
　疲れて休んでいる悟空に向かってウイスが話しかける。
「いやー、オラも何とかまた身勝手の極意を使いてぇーんだけど、どうしても上手くいかねーんだよな。」
「ふん、情けないやつめ。」
「そういうオメーこそ、力の大会以降あのスゲースーパーサイヤ人ブルーになれなくなったんだろ?」
「ふん、貴様と一緒にするな!」
　ベジータは立ち上がり気を高めていく。
「はぁーーーー!!」
「ほう、これはなかなか。」
「おお、すげーぞベジータ!

まさかあの変身をもう自分の物にしてるなんてよー。」
「ふん。当たり前だ・・・と、言いたいところだが・・・。」
変身を解くベジータ
「ん?」
「はぁはぁ。この変身は長くは続かん・・・。」
「悟空さんの界王拳に似た状態ですかね?」
ベジータを観察しながらウイスが杖を取り出す。
「ん?ウイスさん、杖なんて取り出してどうしたんだ?」
「ああ、ちょっと地球へ。
ブルマさんにお願いしていたことがあったので出かけてきます。」
「ブルマに?
一体何の用だ?」
ベジータがウイスに質問する。
「オホホホ、ちょっと倉庫の掃除をしたいと思いましてね。
ブルマさんに掃除ロボットをいくつか頂くことにしたんですよ。」
「ち、あいつ勝手にそんな約束を!」
「なんだ、食いもんじゃねーのか。」

「ええ、と、言うわけで少し出かけてきます。」
そう言うとものすごい速さでウイスは移動していった。
そして、それから数時間後・・・
ウイスが帰ってきた。
「お疲れさした。
みなさん、こちらがビルス様がお住まいになっている星でございます。」
「ん?オメー達まできたんか?」
「ちっ、ゾロゾロと何しにきやがったんだ?」
不機嫌そうにベジータが呟くとブルマが答える。
「決まってんでしょ!掃除しに来たのよ掃除にしに!」
「そうだべ、ベジータさん!普段からビルス様に世話なってんだから掃除ぐらいしねーと申し訳ねーだべよ。」
「ふむ、悟空の嫁。いいこと言うじゃないか。」
チチの態度に機嫌を良くするビルス
「チチ、それに悟飯にピッコロにビーデルまできたんか?あれ?
悟天はどうしたんだ?」
「悟天ちゃんはお勉強とパンちゃんの面倒を見るために置いてきただべ!

「ええ、たまたま暇でしたのでカプセルコーポレーションに顔を出したら巻き込まれまして。」
「私も巻き込まれてしまって。あ、パンちゃんとブラちゃんなら心配いりませんよ。トランクス君と悟天君が面倒を見てくれていますので。」
「ち、あの二人で本当に大丈夫なのか？
　くそ、やはりオレだけでも残っておくべきだったか・・・。」
「すみません、ピッコロさん。」
「まあ、いい。
　それで掃除しないといけないのはどこなんだ？」
　そう言ってピッコロが掃除用具を手にする。
「それではご案内しますのでついてきてください。」
　そう言ってウイスが案内を始める。
　そのあとを悟空とベジータを除いた４名がついていく。
「悟空さー！なんでこねーだべ？」
「いぃ？お、オラもか？」
「あたりめーだべ！」
「ベジータあんたもよ！」

「な、なんで俺がそんなことを！」
「お二人の修行やめちゃいましょうか。」
「えー、そりゃねーよ。ウイスさん！」
「ち、人の弱みに付け込みやがって！」
「うるさい、さっさと行くぞ！悟空、ベジータ！」
　やる気のない二人をビルスが無理やり連れていく。
「なんだ？ビルス様も掃除すんか？」
「ん？僕がやるわけないだろ？」
「じゃあ、なんでついてくるんだ？」
「ああ、掃除ついでにちょっと確認したいことがあるんだよ。」
「確認？」
「ああ、まあ、お前たちには関係のないことだ。
　いいからいくぞ。」
　一同が倉庫へ着くとウイスが倉庫のカギを開ける。
「うわ、汚ねーな。」
「ええ、すごい散らかりようですね。」
「こりゃ、掃除のし甲斐があるべ！」

「そうですね。お義母さん。
　悟飯君、がんばりましょう。」
「ええ、そうですね。ビーデルさん。」
「結構、広いわね。こんなことならお掃除ロボあと数体持ってくるんだったわ。」
「ち、仕方ない。さっさと終わらせるぞ！」
　こうして、倉庫の掃除が始まる。
　そして、掃除開始から3時間が過ぎたころ。
「ふう。そろそろ休憩すっか？」
「そうだべな。ビルス様
　お茶にすんべ。」
「お茶？なにか食べ物とかあるのか？」
「大福さ持ってきたからみんなで食べるべ。」
「おお！でかしたぞ悟空の嫁よ！
　まったくお前にはもったいないくらいできた嫁だな。」
「ほんとうに、以前頂いた豆でーふく、大変美味でしたからね。」
　上機嫌のビルスとウイス
「おーい、悟飯達！休憩すっぞ！」

「分かりました。父さん。」
「今、行きます。」
「わかった。」
「ふう、疲れたからちょうどよかったわ。」
「ブルマ、お前は何もしてないだろ？」
「失礼ね。このお掃除ロボのメンテとかしてたじゃない！」
　そして休憩に入る悟空達
「そういや、ビルス様。
　用事ってのは終わったんか？」
「ん？ああ、これを探しに来たのさ。」
　そう言ってビルスはお札の貼られたツボを取り出した。
「なんだそれ？」
「時の精霊を封じ込めたものです。」
「時の精霊？」
「ええ、もともと大人しい精霊でしたが、ある時期から故意に時を操作し全宇宙を混乱に貶めるという事件を引き起こしましてね。
　厄介なことに、時を操れるだけに破壊することも出来ないためこうして封印している

んですよ。」
「そんでそろそろ封印が弱まってきたころだと思ったからこの新しい札で再度封印してやろうと思ってね。」
　そう言ってビルスは札を取り出す。
「へー、そうなんか。
　ん？新しいのあるんならこれはもういらねーな。」
　ベリっと悟空が札を剥がす。
「「へ？」」
　悟空のその動作に、固まる一同
「ん？オラなんかわりぃことしたか？」
「ば、バカ者！
　新しいのを張る前に封印の札を剥がしてどうする!!」
「え？すぐ張りなおせばいいんじゃねーのか？」
「父さん！
　なにをやらかしてるんですか!!」
「ウイス！急いで時を戻せ!!」
「はい！ビルス様!!」

ウイスが杖を取り出し時を巻き戻そうとするが、それより先に空間が歪む。
そして、そこで悟空達の意識はなくなった・・・。

エイジ７６１　１０月１２日

「ん？いってー今のはなんだったんだ？」
　きょとんとしている悟空にチチの罵声が飛ぶ。
「悟空さ！ダメでねーか。勝手なことしちゃー！」
「わ、わりぃ・・・。ん？チチ、オメーなんか雰囲気変わってねーか？」
「へ？そういやー、悟空さも。そういやここ家じゃねーか？」
　いつも見慣れた風景に驚く二人
「お父さん、お母さん。
　どうしたの？急に？」
「ん？オメー悟飯か？」
「ご、悟飯ちゃんが、小さくなっちまったべ。」
　小さな子供になった悟飯が二人に話しかける。
「・・・急にどうしたのお母さん？僕はいつもと変わんないと思うけど？」
「あ、ああ。そうだべな。ちょっと悟空さとお話があるで、ちょっと待っててくんろー。」
「ああ、そうだな。あ、悟飯、宿題は終わったのか？」

「ん？もうちょっとで終わるよ？」
「そんじゃ、宿題を終わらせて来い。そしたらオラとちょっと遊びに行こうぜ。」
「え？ほんと？わかったー。」
パタパタと自室へ戻る悟飯
「ほんと、どうしちまったんだべ。これはぜってー悟空さのせいだべ？」
「え？オラのせいかよ。んー、まあ、そうかー。
オラちょっと、ビルス様んとこ行ってくる。」
悟空が瞬間移動をしようとしたとき、誰かがドアをノックしてきた。
「ん？誰か来たみてーだな。ちょっとオラ出てくるぞ。」
悟空がそう言って、玄関のドアを開けるとそこにはピッコロがいた。
「ピッコロ？」
「孫・・・少し確認したいことがあってな。お前の家に来たのだが、スーパーサイヤ人という言葉に聞き覚えはあるか？」
「へ？ああ、あるけど、それがどうした？」
悟空が答えるとピッコロは驚いたように話しかける。
「スーパーサイヤ人を知っているんだな!?」
「え？ああ、知ってるっていうか、オラなれるぞ？

おめーも知ってんだろ？」
「・・・今からなってもらってもいいか？」
「へ？ああ、構わねーけど。」
そう言って悟空はスーパーサイヤ人に変身する。
「・・・どうやらようやく未来の記憶を持ったお前と会うことができたようだな。」
「ん？どういうことだ？」
「ピッコロ、そんなとこで立ち話もなんだし、うちに上がるべ。」
「ん？ああ、すまんな。」
チチにそう言われ、ピッコロが家へ入る。
そして、席に着いたところで話が始まる。
「さて、孫、その様子から見てチチも未来の記憶があると判断するがどうだ？」
「未来の記憶ってことは、オラたち、過去にきちまったんか？」
「どうりで悟飯ちゃんが小さくなっちまったわけだべ。」
「・・・なるほど、お前たちは過去に送られたばかりということか。」
「ああ、ピッコロ一体どうなってんのか説明してくれ。」
「そうだな。まず、俺たちは孫のやらかしたせいで過去に送られた。
ここまではいいな？」

「ああ。いやー悪かったな。オラまさかこんなことになるなんて思わなかったからよー。」
「まあ、それ自体今更だな。貴様が何かしでかすなんてことは容易に想像できるからな。
それで、過去に戻された件だが、どうやらかなり個人差があるみたいだ。
俺が戻されたのは天下一武道会の決勝戦前だった。」
「え?そんじゃ、オラと決勝戦で戦ったんか?」
「ああ。だが、流石に勝負にならなかったんでな。適当に戦って負けておいたが、大変だったぞ、わざと負けるのはな。」
「おめーが未来の力を持ってるんなら、あの頃のオラなんて手も足も出ねーだろうからな。」
「まあ、その話は置いといてだ。孫、これからカメハウスに行くんだろ?」
「へ?そうなんか?チチ?」
「いや、オラに言われてもな。んっと、あー、今日は武天老師様のとこに行く日になってんべ。」
「そっか、ってことは、オラの兄ちゃんが来る日ってことか?」
「ああ、そうなるな。
まあ、あいつ自体大したことはないし問題はないだろう。」

「そうだな。ってことは問題はそのあとに来るベジータたちか？」
「そうなるな。流石にこの時代のベジータでは相手にならんが、あいつを殺すわけにもいかんしな。」
「ああ、そんなことしたらブルマにオラが殺されちまう・・・。」
「俺もな・・・。まあ、いい。ブルマの奴も未来の記憶があるから、これから武天老師のところにいって合流するぞ。」
「わかった。あ、悟飯はどうすっかな？」
「とりあえず、連れて行っても問題はなかろう。
　俺が守るし、お前もいるからな。」
「そうだな。よし、ピッコロ。そんじゃ悟飯の準備ができたらじっちゃんのところに行こう。」
「ああ。」
「そんじゃ、二人とも気を付けていくだべ。オラ待ってるだ。」
「ああ、おーい。悟飯、まだ宿題終わんねーのか？」
　悟空が声をかけると自室から悟飯が出てきた。
「終わったよ。お父さん。
　えっと、この人誰？」

「ん？ああ、こいつはピッコロって言って、父ちゃんの友達だ。」
「初めましてだな。悟飯。ピッコロだ。よろしくな。」
ピッコロが優しく悟飯に手を差し伸べる。
「あ、初めまして。」
悟飯が照れながらピッコロに話しかける。
「よし、そんじゃ、行くか。」
「筋斗雲に乗っていくの？」
「いや、瞬間移動で行くんだ。さ、二人ともオラに掴まってくれ。」
ピッコロが悟空の手を取り悟飯と手をつなぐ。
「よし、準備はいいぞ。頼む。孫・・・。」
「ああ、・・・見つけた。そんじゃ、行ってくるぞチチ」
「行ってらっしゃい。夕飯までには戻るんだぞ？」
「ああ、わかった。」
そういって悟空たちがその場から消えた。

エイジ７６１　１０月１２日　その２

悟空がピッコロと合流した同時刻、とある惑星で、二人の男が暴れていた。
「へへへ、手加減してるとはいえ、こいつら、結構やりやがるな。」
「ふん、大したことはない。お前たちが弱すぎるんだ。
まあ、この星の技術を手に入れたら滅ぼすんだから、それまでの辛抱だな。」
大柄なサイヤ人が、小柄なサイヤ人に話しかける。
「でもよー。ラディッツのやつ大丈夫か？
弟を連れてくるって言ってたが、ちゃんと連れてこれるのか？」
「さあな。あいつの弟じゃ、期待なんかでき・・・ん？」
「おい、ベジータ。どうした？」
大柄な男が、仲間であるベジータの様子を心配する。
「貴様は、ナッパ？なぜここに？」
「お、おい。どうしたんだ急に？
大丈夫か？」
「あ、ああ・・・すまんな。少し気になることがあったんでな。」

ベジータがしばらく考え込む。
そして、ナッパに確認を取る。
「おい、ラディッツの野郎は地球に向かったんだよな？」
「ああ、そうだが。」
「よし、俺たちもさっさと地球に向かうぞ。」
「お、おう。それは構わないが、この星はどうするんだ？」
ナッパの質問にベジータがまた考え込む。
そして、ナッパに話しかける。
「おい、この星の代表者はどこだ？」
「ああ、それならあそこだ。
だがよ、あそこを攻め込むのは少々骨だぜ？」
「お前は宇宙ポットの準備をしておけ、俺が片づけてくる。」
「お前が？
面倒だとか言ってほとんど手伝わなかったくせに急にどうしたんだ？」
「気が変わったんだ。いいから早く言われたとおりにしやがれ。
俺が戻ってくるまでに用意しておけよ。」
そういって、ベジータはナッパから聞いた方角へ向かう。

しばらくベジータが移動すると、強固な守りで固められた施設を発見する。
「ここか。
おい、この国の代表者はどこだ?」
「く、サイヤ人め!」
警備兵が放った光線を簡単に弾き飛ばすベジータ
「満足したならそこでおとなしくしていろ。
それとさっさと代表者を出せ。」
「く、あの方に指一本触れさせてなるものか!!」
警備兵が襲い掛かるが、簡単にベジータは倒してしまう。
「ぐ・・・。つ、強い。」
「当たり前だ。貴様ごときが俺に勝てるものか。
実力差が分かったんなら、さっさと代表者を呼んで来い。」
「こ、殺さないのか?」
「俺の気が変わらんうちに代表者を呼べばな。」
「わ、分かった。少し待っていろ・・・。」
警備兵が近くで待機していた仲間に指示を出し、代表者を呼びに向かう。
「さて、素直に言うことを聞いてくれればいいが・・・。まあ、何とかなるだろう。」

「あ、あの・・・。我々の代表が来るまで、そちらでお待ちいただけますでしょうか?」
先ほどの警備兵とは違う警備兵が恐る恐る話しかけると、ベジータがうなずく。
「わかった。案内してくれ。」
「は、はい。こちらへ。」
そして、ベジータは応接室へと通される。
「では、こちらでお待ちを・・・。
あ、あの・・・。あなたたちは我々を滅ぼしにきたのではないのですか?」
「ん?ああ、最初はな。言っただろう。気が変わったんだ。
おっと、こいつがあるとまずいな。」
ベジータがスカウターを外し電源を落とす。
そして、数分後、警備兵を伴って代表者がベジータの前に現れた。
「貴様がこの国の代表か。よし、いいか。今から俺の言う通りにしろよ?」
「まて、一方的に攻めてきたお前たちが今更、私たちに何をしろというのだ?」
「ああ、それについてはすまんな。
こっちにも事情があるんだ。あとで生き返らせてやる・・・ん?1年以上は無理だったか?いや、最悪はあれがあるか。」
「い、生き返らせる?な、なにを言って?」

「いちいち、細かい説明をしている時間はない。俺は急いで地球に行きたいんでな。」
「ち、地球?」
「そうだ。で、いいか。今からお前たちは・・・」
　ベジータが代表に説明をすると代表はしぶしぶだがうなずく。
「うむ・・・我々が滅ぶよりマシか。わかった。フリーザ軍に我らの技術を提供しよう。」
「それでいい。まあ、心配するな。数年のうちにフリーザの野郎はこの俺が殺してやる。」
「あ、あのフリーザを?」
「ああ、だから貴様らは俺の言う通りに動くんだ。いいな?」
「わ、分かった。お前を信じよう。」
　代表が頷くとベジータはスカウターを取り付けナッパの元へと戻っていく。
「お、ベジータどうだった?」
「問題ない。奴らは俺たちに技術を無償で提供することになった。
　フリーザの野ろ・・・フリーザ様にも伝えてある。大層ご満足いただけたようでな。
　しばらく休暇を取りたいと言ったら、あっさり許可してもらえた。」
「お、マジかよ。あのフリーザ様がか?そ、そうか。じゃ、行くか?地球へ。」
「ああ、だが、その前にその座標、少しいじらせてもらうぞ。」

「ん？構わんがどうするんだ？」
　カチカチと座標を弄るベジータを不思議そうにみるナッパ
「ラディッツの奴が設定した近くの座標に変えるだけだ。
　カカロットの野郎もいれば、そのほうがいいだろう？」
「おお、なるほどな。分かった。ん？ラディッツのやつ、カカロットの奴と接触したみたいだぜ？」
「そうか。なら早く移動を開始するぞ。どうせ奴はカカロットには勝てんからな。」
「え？そうか？そりゃ確かにラディッツのやつは弱いけどよ。
　いくら何でもカカロットとかいうガキには殺されないだろ？」
「・・・だといいがな。さあ、いくぞナッパ。」
「おう。」
　こうして、ベジータ達は地球へと向かうことになった。

エイジ７６１　１０月１２日　その３

時は少し戻り、カメハウスに悟空たちはやってきていた。
「オッス。みんな。
クリリンが居てくれて助かったぞ。」
悟空が軽い感じでカメハウスにいるメンバーに挨拶をする。
「ご、悟空?･え?･今、どうやって来たんだ?･」
突然現れた悟空達に驚くクリリン
「瞬間移動だ。オラにはそれができる。」
「しゅ、瞬間移動って、そ、そんなことより。お前、一緒にいるのはピッコロ大魔王じゃないか!」
「え?･ああ、大丈夫だ。色々あって今はオラたちの仲間になったんだ。
それより、じっちゃん。ブルマはいるか?」
「それよりってお前さん・・・。しかし、どういうことじゃ?･確かにピッコロからは邪悪な気は感じ取れん・・・。」
「ふん、気にするな。孫が言っていただろう。色々あったんだ。色々な・・・。」

「い、色々って、まあ、あの天下一武道から結構経ってるけどさ・・・。」
「正直、今だにお主が悟空の味方になったというのは信じられんが・・・
　儂としては少し思うところもあるが・・・
　まあ、よい。それよりブルマじゃったな？少し待っておれ。」
　そういって亀仙人がブルマを呼びに部屋に入っていく。
　しばらくして、亀仙人と一緒にブルマがやってくる。
「久々ね。孫君。
　で、ピッコロが一緒ってことは、孫君もそうなのかしら？」
「ああ。そうだ。悟空とチチだけだな。どうやら悟飯はまだらしい。」
「なるほどね。ってことは、今わかっているのは孫君と私とピッコロにチチさんの４人か。
　ねえ、そろそろベジータ達が来る頃よね？ベジータも記憶を持っていると思う？」
　ブルマの質問にピッコロが考え込む。
「正直わからんな。だが、記憶を持っていれば多分、すぐに地球に向かってくるだろう。
それと、その前に孫の兄貴がやってくるはずだ。」
「あー、そういえば居たわね。でも、今のあんた達なら楽勝でしょ？」
「ああ、それは問題ないだろう。ん？どうやらこっちに向かってきているようだな。」

「へー兄ちゃんか。なあ、やっぱ殺さないといけないんか？」
「歴史通りにするならそうだが、そうするとお前も殺さないといけなくなるしな。
　さて、どうしたものか。」
　悟空たちのやり取りを見ながらクリリンたちが話しかけてくる。
「な、なあ。お前たち、さっきから何を言ってるんだ？」
「悟空に兄じゃと？そんな話は儂は聞いたことがないが・・・。」
「まあ、無理に殺さなくてもいいんじゃないかしら。」
「そうだな。実力差を見せつければ諦めるかもしれんしな。」
「そうだな。じゃ、オラが戦ってもいいか？」
「ああ、それは構わんが・・・。どうやら来たようだな。」
　ピッコロが上空をみると一人の男が飛んでくるのが見える。
「な、なんだ。あいつ？」
「へんてこな恰好じゃのう。」
「お前たちは危ないから下がっていろ。」
「お、おう。な、なんかお前に心配される日が来るとは思わなかったよ・・・。」
「あと、こいつも一緒に頼む。」
　ピッコロが御飯をクリリンたちに預け後方に下がらせる。

「え?この子は?」
「あ、わりーまだ言ってなかったな。この子はオラの子で・・・
　お、来たか。」
「ん?この俺が来ることが分かってたのか?
　まあ、いい。カカロットよ。俺は・・・。」
「なあ、兄ちゃん。正直、兄ちゃんじゃオラの相手になんねーから帰ってくんねーか。」
「な!なんで俺のことを?
　い、いや。そんなことより貴様が俺より強いだと?
　笑わせるな。戦闘力３００程度の貴様が、この俺より強いだと?」
「ん?ああ、じゃあ、その強さの分かる機械でオラの強さを見てみろよ。
　行くぞ?」
「え?あ、ああ。」
　悟空に言われるがままにスカウターで計測を始めるラディッツ
「・・・戦闘力３０００、９０００、１８０００」
　ボンっという音とともにスカウターが壊れる。
「な、あ、あ、ありえん。カカロットが２万以上あるというのか?
　そ、そんな馬鹿な・・・。」

「あちゃー、壊れる手前で気を抑えるつもりだったんだけどな。
なあ、ピッコロ。これ壊しちまってベジータ達来れるんかな？」
「え？いや、分からんが、どうだろう。おい、どうなんだ？」
「な、なんでベジータのことまでお前たちが知っているんだ？」
「おーい。ブルマー。兄ちゃんのこの機械直せっか？」
悟空に呼ばれてブルマが近寄る。
「んー、このくらいならなんとか直せるかも知れないけど、ちょっと時間がかかるかもね。
ちょっとあんた。予備とかないの？」
「え。宇宙ポットに戻ればあるが・・・って、なんで、こいつはこんなに偉そうなんだ？ふざけるなよ！殺すぞ。地球人が！」
ラディッツが威嚇するが、ブルマが軽くあしらう。
「はいはい。っていうか、あんた私に手を出したらベジータに殺されるわよ？」
「はあ？な、なんでベジータが出てくるんだ？」
「孫君、ちょっとお兄さんと一緒に予備のやつ持ってきなさいよ。」
「え？ああ、分かった。よし、兄ちゃん案内してくれ。
帰りはピッコロの気を探して瞬間移動で戻れっから心配すんな。」

「ふ、ふざけるな！なんで俺がお前たちの言うことを聞かなければならない！
俺に言うことを聞かせたければ、この俺を倒してからにするんだな。」
「・・・あんた、死にたいの？」
ブルマが残念そうなやつをみるようなそんな冷ややかな目でラディッツを見る。
「な、なんだ。その目は。お、おい。そこのナメック星人、お前もなんだそのやる気のない態度は！」
「孫、気絶させん程度に相手をしてやれ。」
「ああ。しかし、どんくらい手加減すりゃーいいんだ？
ま、やってみっか。」
そして、悟空とラディッツの戦闘とも言えない戦闘が始まり、数分後・・・

エイジ７６１　１０月１２日　その４

「ば、馬鹿な・・・。この俺が手も足も出ないだと。
さ、さっきの数値はスカウターの故障じゃないのか・・・。」
息を切らしながらラディッツが悟空に話しかける。
「さて、そんじゃ。さっきの機械取りに行くぞ。」
「あ、ああ。
ち、仕方あるまい。ついてこい。」
フラフラと飛び上がりながらラディッツが移動を始め、悟空がそれについていく。
「さて、あとはあいつらが帰ってくるまで待てばいいな。」
「そうね。ん？どうしたの。クリリン？」
驚きすぎて固まってるクリリンを見たブルマが話しかける。
「あ、あの・・・。ご、悟空は一体どうしてしまったんですかね？
数年前まであんな動きは出来なかったのに。」
「ふん、あの程度、孫にとっては準備運動にもならんぞ。」
「え？な、なあ。ピッコロ大魔王。お前も悟空と同じぐらい強いのか？」

「ん?あのくらいなら俺でも出来るな。それと、ピッコロ大魔王はやめろ。
・・・ピッコロでいい。」
「あ、ああ。それより、この子は一体・・・。」
クリリンが横にいる悟飯を見て不思議そうにしているとブルマが答える。
「ああ、その子は悟飯君よ。孫君の息子の。」
「あー、なるほど。悟空の息子かー。って、ええー!?」
ブルマの発言に亀仙人とクリリンが驚く。
「さ、孫君たちが戻ってくるまで時間があるし、どうしようかしら?」
「ま、まあ。ここではなんじゃ、部屋に行くとするかの。」
そういって一同は家の中に入ろうと移動を開始する。
するとその時、空から魔族がやってきた。
「今日は千客万来じゃのう。今度は一体なんじゃ?」
「さあな?なんだ。こいつらは?」
「くくく、ここにあったか。ドラゴンボール。さあ、殺されたくなければそいつをもらおうか?」
「なんだ、こいつら?」
「ふむ・・・。相当強そうじゃ。油断するでないぞ。クリリン。」

「は、はい。」
　戦闘態勢を取る二人の前にピッコロが立つ。
「はあ、お前たちが何者か知らんが、殺されたくなければ消えろ。」
「くくく、随分と上から言ってくれるではないか。神の片割れよ。」
「ん?俺のことを知っているのか・・・。
　ああ、お前は確かガーリックだったか。」
「ん?俺のことを知っていたか。だが、だったら俺の実力も知っていよう。
　老いたとは俺は、貴様ごときが敵う相手では・・・」
　年老いた魔族がそういった瞬間、ピッコロのエネルギー波を放ち完全に消滅してしまった。
「これで少しは静かになるだろう。」
「よ、容赦ないな。お前・・・。」
「ふん、奴はさっさと始末した方がこの世界のためだ。」
「じゃ、今度こそ家の中でのんびり孫君たちを待ちましょう。」
　そして、しばらくしてスカウターの予備を取ってきた悟空たちが現れる。
「戻ったぞ。ブルマ。」
「おかえりなさい。孫君」

「おい、孫の兄よ。そいつでベジータとやり取りをしろ。」
「ち、偉そうに。
・・・ん？睡眠中になってるな。それにここに向かってきているのか。
ん、ナッパから伝言が入ってるな。」
ラディッツがスカウターを操作し内容を確認する。
「ベジータ達が地球に向かって移動しているようだ。
そうだな。あと半年もすれば辿り着くだろう。」
「そうか。オラ早くベジータに会いてーな。」
「私もそうね。でもこの時代のベジータって悪人なのよね。」
「まあ、記憶を持っていなければ簡単に倒せるだろう。
さて、一応、歴史通りに動いたほうがいいだろう。
孫、お前は界王様のところに向かって半年間そこにいてくれ。」
「分かった。じゃ、オラちょっと瞬間移動で行ってくる。」
悟空が瞬間移動で移動しようとするとピッコロがそれを止める。
「まて、この時代の神のやつに連れて行ってもらえ。」
「え？」
「忘れるな。この時代だとお前と界王様はまだ面識がないんだ。」

「あ、そっか。分かった。じゃ、オラ神様んのとこ行ってくる。」
「ああ、そうしてくれ。
　さて、俺は悟飯に稽古をつけてやるか。」
「なあ、お、俺たちはどうすればいい？」
　クリリンがピッコロに質問するとピッコロが少し悩み答える。
「お前はヤムチャと天津飯、餃子を連れて俺のところにこい。
　ああ、そうだ。カリンのところにいるヤジロベーもついでに連れてこい。」
「え？ああ、しかし、よくヤジロベーのことまで知ってるな。悟空から聞いたのか？」
「いや、そういうわけではないんだが、とにかく連れてこい。」
「ヤムチャさんは連絡つくけど、天津飯たちはどうかな？」
「ねえ、孫君のお兄さん。その機械で戦闘力の高そうなの探してよ。」
「な、なんで俺がそんなことをせねばならんのだ！」
「ピッコロ、やっちゃいなさい！」
「お前という奴は・・・。いいから、協力してやれ。こいつは怒らせると色々面倒なんだ。」
　やれやれとピッコロが言うと、ラディッツがしぶしぶ了解する。
「ち、じゃあ、ついてこい。ハゲ！」
　空を浮かび、移動をしようとするとクリリンが慌てて止める。

「ちょ、ちょっと待ってくれ。俺は空飛べないんだよ。」
「ち、面倒なやつだな。空も飛べんとは・・・。」
そう言って、クリリンの手を掴みラディッツが浮かぶ。
「あわわわ!!、お、おい。離さないでくれよ!」
「ち、そうして欲しくなければおとなしくするんだな。」
文句を言いつつ、クリリンを連れてラディッツが移動を始めた。
「さて、悟飯、俺と一緒に行くぞ。」
「え?な、なんで?お、お父さんは?
ぼ、僕、稽古つけてもらうならお父さんがいい・・・。」
「わりぃーな。悟飯、オラが今から行くとこはおめーじゃちょっとあぶねーからな。
ピッコロに稽古つけてもらってくれ。」
「そ、そんなぁ・・・。」
今にも泣き出しそうな悟飯を見ながらピッコロが悟空に話しかける。
「少し厳しめに鍛えるが構わんな?」
「ああ、悟飯を強くしてやってくれ。あ、チチにやつにちゃんと言っといてくれよ?
じゃ、みんな、半年後に会おうな!」

悟空が瞬間移動で神様のところに移動を開始する。
「まあ、チチの奴も事情は知っているだろうから、大丈夫だろう。
さて、じゃあ、行くぞ。」
悟飯の手を握り、ピッコロも移動を始める。
「えー?･いやだよ。おとーさん!･どこ行っちゃったの?･おとーさん!!」
泣きわめく悟飯を見ながらピッコロがため息をつく。
「はあ、そうだった。この頃のこいつは甘ったれだったな・・・。
やれやれ、先が思いやられる・・・。」
こうして、ベジータ達が来るまでの半年間、それぞれが修行をすることになった。

ちなみに、この後、ピッコロが悟飯に稽古をつけることを知ったチチがそのあとピッコロの元に文句を言いに行き、結局チチもその場に居座わるといって聞かなかったチチをブルマたちが説得して連れ戻すのにひと悶着あった・・・。
そして、あっという間に半年が過ぎようとしていた。

それぞれの修行　その1

神様のいる神殿へやってきた悟空は現在、閻魔大王のところにやってきていた。
「と、言うわけでこの、人間、孫悟空を界王様のところに向かわせたいのです。」
「ふむ・・・。この人間を界王様のところにね・・・。
こいつ、死んでもいないのにこんなところに連れてきて、わざわざ危険な蛇の道に送り込むというのか?」
悟空を見ながら閻魔大王が神に話しかける。
「はい。この孫悟空、人間の力を超えておりまして、神にも勝る力を得ております。
界王様のところに送り、更なる力を得られればと思っております。」
「神にね・・・。どうにも信じられんが、まあいい。
地獄に落ちてしまったり、途中で死んでしまっても自己責任だぞ?」
「ああ、大丈夫だ。今のオラならすぐ、界王様んとこに着くからな。」
「１００万キロもあるんだぞ?まあ、よかろう。お前の功績は素晴らしいものだし、界王様に会う資格はあるだろう。」
「サンキュー閻魔のおっちゃん。」

「こ、これ！なんという口の利き方を！」
「あ、わりーわりー。そんじゃ、オラ、さっそく行ってくる。」
　逃げるように悟空は蛇の道へと向かう。
「・・・なんとも落ち着きのないやつだな。」
「はあ、しかし、あれでいて、頼りにもなる男なのですよ。」
「ふーん、まあ、界王様のところに着くのは早くても数か月は必要だろう。
　生身の肉体では、途中で飢えてしまうだろうな。」
「それはどうでしょうか。孫悟空から感じる力は以前のものとは比べ物にならないぐらい大きなものでした。私の元で修業してた頃の何十倍も上・・・。きっとあいつなら辿り着くでしょう。」
「信頼しておるのだな。まあ、死んだら天国に送れるよう準備しておいてやる。」
「ははは、ありがとうございます。
　・・・孫、無事にたどり着くのだぞ。」
「!!」
　そして、すぐ蛇の道から神の気を感じ取る神と閻魔大王
「な、これは神の気？
　まさか先ほどの孫悟空の気なのか？」

「ば、ばかな。強くなったと思っておったが、神の気を纏うほど強くなったというのか？」

蛇の道へ続く道を見ながら驚く二人

そして、時は少し遡り蛇の道へと辿り着いた悟空

「では、道案内はここまでです。」

「ああ、サンキュー。

よし、んじゃ、一気に行くか。ハァー!!」

スーパーサイヤ人ブルーへと変身した悟空は武空術で一気に界王様の元へと向かった。

「へ、変身した。しかも物凄い早さだった・・・。」

悟空が移動を始め、数分後、界王のいる惑星を発見する。

「お、見つけた。よし、もうブルーはいいや。」

変身を解いた悟空は、界王の前へと降り立つ。

「界王様いるかー!」

「お、お主、一体何者じゃ？

神の気を纏っておっただろ？」

驚きながら現れた界王に悟空が答える。

「へへへ、まあ、色々あってな。
そんなことより、界王様、オラに稽古をつけてくれ。」
「稽古だと?
うーむ、まあ、構わんが儂の修行は厳しいぞ?」
「あ、修行って言ってもよ。ダジャレとかじゃねーぞ?
武術の方だ。」
悟空が慌てて界王に話しかけると、界王が残念そうに答える。
「なんじゃ、そっちの方か。しかし、お主に教えられることはなさそうじゃが。
はっきり言って、お主は儂より強い。そんな奴に教えられるといえば儂の技ぐらいじゃが・・・。」
「界王拳と元気玉なら、もう使えるぞ?」
「な、なんでその技を知っておる!?
しかも界王拳は儂が思い描いていただけで実現できなかったほど難しい技なのだぞ?
お主、一体何者じゃ?」
「えっと、そのあたり含めて説明するぞ。」
悟空が界王に説明を始めようとすると不意に声がかかる。

「それは私も興味がありますね。
ぜひ、一緒にお聞かせ願いたいものです。」
「ん?あ、あんたはウイスさん!」
「な、なんで天使様がこんな星にわざわざ?」
「ホホホ、いきなり神様の気を感じたら気になるじゃないですか。
それに、ビルス様は今、眠っていらっしゃるので私、暇なんですよね。
それで、あなた、先ほどのお話をしていただけませんか?
界王神様もこちらに来るようですし、彼が来たらで構いませんが。」
「え?界王神様もか?」
悟空が驚いていると、界王神が瞬間移動して現れた。
「こ、これは驚きました。まさか、天使まで来ているとは。
始めまして。私はシンと申します。これから、彼についての話をするところでしたか?」
「ええ。それでは、話していただきましょうか。あなたが何者なのかを・・・。」
悟空は界王達に説明を始めた。
そして、悟空の話を聞いた3人はそれぞれが考え込む。
「ってなわけでよ。一応、歴史を大きく変えねーようにはしてんだけど、細かいとこで

ちょっと変わってきちまってんだよな。」
「・・・ふむ。時の精霊の仕業だとすると、何が狙いなのか。おおよそ検討はつきます。」
「ほ、本当か。ウイスさん！」
「ものすごく、嫌な予感がするのですが・・・。」
「私もです。界王神様」
「あ、儂もです。なんかすごく下らん理由のような気がします。」
　界王神、キビト、界王の3名が不安そうな顔をする。
「あなた方の予想は間違っていないと思いますよ。おそらく単なる暇つぶしでしょう。
　飽きたら元に戻ると思うので、放っておいても構わないとは思いますが、少し不便ではありますね。
　取り合えず、私は時の界王神のところに行ってきます。
　悟空さん、あなたは取り合えずこの界王星で修業していてください。」
「でしたら、私たちがお送りいたしましょう。キビト頼みます。」
「はい。分かりました。界王神様」
「では、よろしくお願いします。
　それでは、悟空さん。私が来るまでこちらで修業をしておいてください。
　では、彼の相手をお願いいたします。界王様」

「は、はい！分かりましたー。」
界王神たちが居なくなるまで界王が深々とお辞儀をするとその横でぼーっと立っている悟空に気付き頭を下げさせる。
「これ！お前も頭を下げんか！
お前に必要なのは武術より礼儀作法じゃな。」
「えー、もういねーんだし、いいじゃねーか。それにオラそれ一番苦手だぞ？」
「えーい。黙らんかい！修行ついでにみっちりしごいてやるから覚悟するんじゃな。」
「そ、そりゃねーよ。界王様！オラ、そんな失礼なことしねーって。」
「お前、どの口が言っとるんじゃ・・・。」
あきれた様子で悟空を見る界王
「未来の儂も苦労しておるんじゃろうな・・・。」
ボソっとつぶやいた界王は深いため息をついた。
そして悟空の修行が始まった・・・。

それぞれの修行　その２

ピッコロは、幼い悟飯を荒野へと運んでいた。
「さて、悟飯、お前に早速稽古をつけるわけだが、まずはお前自身の力の自覚を始めるところから始めようか。」
「え？なに、どうするの？」
ピッコロが悟飯を掴み、近くの岩場へ投げ込む。
「わーーーー!!」
「さあ！気を解放しないとぶつかるぞ!!」
ピッコロは未来の記憶を元に悟飯を岩にぶつけようとしていた。そして狙い通り悟飯に変化が起きる。
「はあーーー!!」
悟飯から放たれた気が岩場を消滅させる。
「まあ、この頃の悟飯ならこんなものだろうな・・・。
どうだ、分かったか？お前には力がある。この力を自由自在に使いこなせるようにするんだ。」

「ぼ、僕がやったの？で、でも僕戦いたくなんてないよ。」
悟飯が泣きそうな顔をするとピッコロが悟飯に話しかける。
「悟飯。それではお前の大切な者を失ってしまうかもしれないんだぞ？」
「え？」
「お前の父は、強いが無敵というわけではない。そんなときにお前は黙ってみているだけでいいのか？」
「・・・僕は、お父さんやお母さんを守りたい。」
「ふ、なら強くなるんだ。そのために必要なことはすべて教えてやる。
だから、泣き言はやめるんだ。悟飯。」
「・・・はい。おじさん。」
「・・・ピッコロと呼べ。
さて、では修行を始めていく。」
「は、はい。よろしくお願いします。ピッコロさん。」
こうして悟飯とピッコロの修行が始まった。
そして、月日は流れいく。

「悟飯、ここまでの修行でお前はかなり強くなった。

今日からは、お前の叔父や父の仲間たちと合流し、修行をしていく。
今まで以上に厳しいものとなるがいいな？」
「はい、ピッコロさん。」
悟飯が返事をすると空から近づいてくる存在に気付く。
「誰かきます。」
「ん？ああ、来たようだな。」
悟飯たちの元にラディッツ達が合流した。
「おい、ピッコロ。今日からはこいつも一緒に修行するのか？」
「ああ、そうだ。
悟飯はこの数か月で俺がみっちりと鍛えてやったからな。
今のお前以上の力を身に着けているだろう。」
「ふん、どうだかな。
今の俺は戦闘力５０００まで上がっている。
そんな俺の相手が務まるとは思えないがな。」
ラディッツが自信満々に答える。
「ん？ああ、そういえばお前は相手の力の分かる機械を持っていたな。
ちょうどいい、全員の戦闘力とやらをみてくれ。」

「ふん、いいだろう。
あのブルマとかいう女に性能を上げてもらったからな。今なら戦闘力１００万ぐらいまで測れるそうだ。
まあ、実際１００万などということはありえんがな。」
そういいながらスカウターを操作するラディッツ
そして・・・
ピッコロ：測定不能
悟飯：７５００
クリリン：５１００
天津飯：５２００
ヤムチャ：５１５０
餃子：３８００
ヤジロベー：８０００
ラディッツ：５１５０
「な、馬鹿な。７５００だと?あ、ありえん。
ピッコロが強いのは分かっていたが、まさかカカロットのガキまで俺の力を上回っているとは・・・。」

「流石、悟空の息子だな。ていうか、俺勝ってるのって餃子だけか・・・。」
「ははは、クリリン。そう気を落とすことないさ。ほとんど誤差の範囲じゃないか。」
「そうだな。餃子も頑張っているが、流石に差がついているしな。」
「天さん。それより、ヤジロベーがピッコロを除くと僕たちの中で一番強いことの方がおかしいと思う。」
「ふん、俺はおみゃーたちと違って、戦いたいわけじゃーねーんだがや。
　わりーが、これでおさらばさせてもらうでな。」
　ヤジロベーが逃げようとすると、ピッコロが不敵に笑う。
「この俺から逃げ切れるのなら好きにするといい。」
「え？い、いやー、じょ、冗談だがや、本気にしねーでよ。」
　焦りながらヤジロベーが答える。
「まあ、あいつ。ちょくちょく修行から逃げ出すからその度にピッコロのお仕置きを受けてるんだよな。
　ある意味一番実践詰んでるよな・・・。」
　クリリンの一言に頷くヤムチャ達
「だが、始めは驚いたぜ。まさかあのピッコロが俺たちに稽古をつけてくれるなんて思ってもみなかったからな。」

「ああ、俺もだ。だが、天下一武道会の決勝からこいつは様子が変だったしな。
なんというか、悪意というものがなくなっていた。」
「うん、今のピッコロは悪人じゃないと思う。」
「ふん。好き勝手言いやがって。
さて、お前たちの修行だが、今日からは悟飯と戦ってもらう。」
「悟飯とか。俺達よりも強いんだよな。こいつ。」
「だが、戦闘力の差だけが強さというわけではないのだろう。ラディッツ?」
「そうだな。実際、戦闘力が低くても厄介な種族はいるからな。
それにお前たちの多彩な技は、こいつにとってもいい刺激になるんじゃないか?」
「よ、よろしくお願いします。皆さん。」
悟飯がお辞儀する。
「ああ、とはいっても、実際お前の方が強いみたいだしな。
俺達は胸を借りるつもりで戦わせてもらうさ。」
クリリンが答えると一同が頷く。
「よし、それでは早速始めろ!」
こうして、悟飯たちの修行もヒートアップしていった。

そして、更月日は流れ、ベジータ達、サイヤ人が地球にやってきた。

サイヤ人襲来！

荒野でピッコロたちが、休んでいると大きな気が地球に近づいてくるのを感じ取る。
「ピッコロさん。この気は・・・。」
「ああ、ようやく来たみたいだな。
よし、悟飯。準備はいいな？」
「はい！」
悟飯が気合いを入れると、クリリンたちが合流してくる。
「ついに来たな。しかし、一人は何とかなりそうだけど、もう一人は気が感じ取れないな。」
「ああ、ラディッツの話だと気を感じ取れる方はナッパってやつでいいみたいだがな。」
「そうだな。戦闘力４０００だから間違いないだろう。
お前たちも強くなったが、ベジータの戦闘力にはまだ及ばないから取り合えずベジータと戦うときは注意しておけ。」
「俺たちもかなり強くなったんだけどな。
俺でも1万近くあるっていうのに、そのベジータってやつは2万近いんだろ？」

「2万か・・・。俺と天津飯、ラディッツの3人が一緒に戦ってやっと勝てるかどうかってところか。」
「ああ、だが、それでも以前ならば到底信じられんことだ。
　この俺が、3人がかりだとはいえ、あのベジータに勝てる可能性が出てきているんだからな。」
「さて、そろそろ地球に来るぞ。お前たち、油断はするなよ。特にヤムチャ!!」
　ピッコロがヤムチャを注意する。
「え?な、なんで俺だけなんだよ。ピッコロ。
　大丈夫だって。俺だって強くなってるんだからさ。」
「・・・ん、ああ、いや。まあ、そのなんだ。
　お前は油断しやすいからな。注意しておけよ。」
「わかってるさ。さあ、サイヤ人たちが地球にくるぞ!」

　そして、サイヤ人が地球に襲来してきた。

　ところ変わり、ベジータ達
「ここが地球か、ベジータ?」

「そうだ。さて、早速ラディッツの奴のところに向かうか。」
「おう。・・・ん?はあ?
お、おい。おかしいぜ。ラディッツの奴に合わせてあった戦闘力が１４０００もありやがる。
こ、故障か?」
「・・・そうか。だが、たかが１４０００俺の敵ではないな。」
「お、お前はそうかもしれないが、俺にとってはありえない状況だぞ?
それに戦闘力１万越えがゴロゴロ居やがるぞ?」
「ふん、大方、スカウターの故障だろう。お前は数値にビビりすぎだ。
なんの問題もない。それよりそいつらのところに行くぞ。着いてこい。」
「あ、ああ・・・。」
ベジータ達が悟飯たちの元にやってくる。
「き、来たか・・・。」
「ふん、ラディッツ。生きていたようだな。」
ナッパがラディッツに話しかける。
「ああ。なんとかな。それより何をしに来たんだ?」
「ん?ああ、俺は興味なかったんだがな。ベジータの奴が地球に来たいって言うもんだ

からよ。」
「ベジータが?」
「ふん、そんなことはどうでもいい。おい、カカロットの奴はどこだ?」
ピ・・・そこのナメック星人」
「・・・孫ならここにはいない。だが、すぐに駆けつけてくるだろう。」
「そうか。なら待たせてもらおう。
おい、ナッパ適当にそこらへんで待つぞ。」
そう言ってベジータが近くの岩場に座る。
「お、おい。ベジータどうしちまったんだ?」
俺は半年ぶりに暴れたいんだが?」
「・・・ち、ならお前だけで遊んでろ。
俺は興味ない。」
「まったく、どうしちまったんだお前は?
まあ、いいや。そうだな。よし、栽培マンの種があったしこいつでちょっと遊ぶか。」
そういうとナッパが栽培マンの種を取り出し蒔き始める。
「へへへ、ここの土はいい土だな。これならいい栽培マンが育つだろう。」

そして、6体の栽培マンが現れた。
「よし、お前たちこれから1対1でこいつら勝負してもらおう。
まずはどいつからやる?」
ナッパに対して天津飯が答える。
「ならば、俺からやらせてもらおう。」
「よし、それじゃ、始めろ!」
ナッパの合図を受け、栽培マンが天津飯に襲い掛かるがあっさりと倒されてしまう。
「大したことはないな。」
「おー、まじかよ。こいつら戦闘力だけならそこにいるラディッツより上なんだがな。
よし、次はどいつがやるんだ?」
「なら、次は俺がやろう。
ここらでお遊びはお終いってところを見せてやるぜ。」
「「お前はダメだ!!」」
ピッコロとベジータが同時に叫ぶ。
「え?な、なんで?」
「・・・ちっ。おい、ク・・・クリクリ頭のチビ。お前が戦え!」
「え?お、俺かよ。まあ、いいけどよ。」

「・・・おい、ベジータといったな。なぜ止めた?」
「・・・ふん、まずはそっちの弱そうなやつを相手にさせるだけだ。」
「・・・」
　ピッコロとベジータがにらみ合う。
「あ、あのー。始めてもいいのか?」
　クリリンが申し訳なさそうに話しかけると、ナッパが答える。
「お、おう。じゃあ、始めろ。」
　そしてナッパの合図でクリリンと栽培マンが戦いを始める。
　あっという間に勝負がつき、次にチャオズが戦うことになる。
「おいおい、まじかよ。3体もやられちまったよ。
　次は誰だ?」
「よし、今度こそ俺が・・・。」
「お前はダメだと言っただろうが!!」
　再びピッコロとベジータが怒鳴る。
「え?な、なんで・・・。」
　半泣き状態のヤムチャがトボトボと下がる。
「・・・お、おい。じゃあ、どうするんだよ。ベジータ。」

「・・・そうだな。おい、そこのガキ。お前カカロットの息子だろ？
お前がやれ。」
「え？ぼ、僕？」
「・・・悟飯、油断しなければお前なら楽に勝てる相手だ。心配はいらん。」
「分かりました。ピッコロさん。僕が行きます！」
「ほう。カカロットのガキか。
こいつは楽しみだ。」
そして、あっという間に栽培マンを悟飯が倒す。
「・・・お、おい。ベジータやっぱりさっきのスカウターの数値は間違ってなかったんじゃないのか？」
「そうみたいだな。これ以上は時間の無駄か。
おい、そこの栽培マンをさっさと片づけろ。」
「え？あ、ああ。」
そう言ってナッパが生き残っていた栽培マンをしまう。
「さて、ナッパ。もういいだろう。ここで大人しくカカロットを待て。」
「お、おう・・・。」
ナッパがベジータの指示に従い、近くの岩場に腰掛ける。

「おい、ベジータ。少し話があるんだが、いいか?」
ピッコロがベジータに声をかける。
「・・・いいだろう。どうせカカロットの奴が来るまでは暇だしな。付き合ってやろう。ナッパ、死にたくなければここで大人しくしてろよ。」
「あ。ああ・・・。」
「では、こっちに来てくれ。」
「ああ。」
ピッコロとベジータが移動を始める。
「・・・俺達はどうすればいいんだ?」
「と、とりあえず、ヤムチャさんを慰めようぜ。みんな。」
「そ、そうですね。なんか、ピッコロさんとあのベジータって人に怒鳴られて落ち込んでますし。」
「そ、そうだな。」
「ヤムチャ、元気出せ!」
残った悟飯たちはヤムチャを元気づけることにした。

悟空登場

「そんじゃ、行ってくるぞ。界王様、ウイスさん。」
悟空が準備を整え界王に伝える。
「うむ。まあ、お主なら楽勝だろうがくれぐれも油断するなよ?」
「ああ。分かった。」
瞬間移動を使い悟空が消える。
「ふむ。不思議なやつじゃったが、まあ、悟空なら問題ないじゃろう。
それにあの強さなら、フリーザにも勝てるかもしれん・・・。
いや、それは高望みしすぎでしょうか?」
「さあ、どうでしょうね。
さて、悟空さんとベジータさんの戦いを見守りましょう。」
「そうですな。悟空、頑張るんじゃぞ・・・。」

そして、瞬間移動した悟空はピッコロたちの前に現れる。

「オッス、ピッコロ！」
「孫、ようやく来たか。」
「瞬間移動か・・・。やはりカカロットも未来の記憶を持っているらしいな。」
「ああ、記憶だけじゃねーけどな。力も未来と変わんねーぞ？
　まあ、修行したからあの時よりも強くなってるけどな。」

「ふん、それよりこの後のことだが、とりあえず俺と戦ってもらうぞ。」
「え？ああ、オラは構わねーけど、戦ってどうするんだ？」
　悟空が疑問を浮かべると、ピッコロが答える。
「ある程度戦ったらベジータが撤退する。
　孫、お前はそれを見逃せばいい。その後、俺たちはナメック星に向かいフリーザを討つ。」
「分かった。じゃ、早速はじめっか？」
「待て、戦う前にある程度、ナメック星に行くための会話をしておかなければならん。
　お前に話を合わせられるかいささか不安だが、俺たちの会話に合わせろよ。」
「お、おう・・・。」
「よし、では孫、お前はしばらくしてからこっちに来てくれ。

とりあえず、ベジータが適当に悟飯たちを追い詰めるからそのタイミングで現れてくれるのがベストだな。」
「んー、難しいな。そんな器用なことする自信ねーぞ、オラ?」
「スーパーサイヤ人になるから、そのタイミングでこい。
それならお前でも分かるだろう。それと、その前にこの内容を自然に話せるように練習しておけ。」
ベジータが悟空に紙を渡す。
「げ、オラ長い文章とか覚えれねーぞ?
お、これなら大丈夫だ。なんとかわかるぞ。
じゃ、オラここで待ってるぞ。」
悟空と別れ、ベジータとピッコロが移動を始める。
「さて、じゃ、オラはここで暇でもつぶしてるかな。」
そして・・・

「お、ピッコロたちが戻ってきたな。」
「ああ。一体何を話してたんだ?」
「待たせたな。さて、ベジータ。平和的に解決したかったが、どうやらそれは無理なよう

だな。」
　ピッコロがベジータを睨みながら話す。
「その通りだ。
　貴様がいるということはドラゴンボールがこの地球にもあるんだろう？
　それを俺達のために使ってもらおうと思っていたが、別に貴様である必要はない。
　ナメック星に直接言って願いを叶えてもらえばいいだけだからな。」
「ナメック星？」
「なんだ、お前。宇宙人だったのかピッコロ。」
「ふん、俺の故郷のことなんぞどうでもいいが、殺されてやるわけにはいかないんでな。
抵抗させてもらおうか。」
「お、おい。ベジータ。大丈夫なのか？
　こいつら、戦闘力１万以上だぞ？
　いくらお前でも、勝てないだろ？」
　心配するナッパを見てベジータが笑う。
「ふん、よく見ていろナッパ！貴様のスカウターで俺の数値をな！」
　ベジータが気を高めていく。
「な、戦闘力２万、４万・・・ち、スカウターが壊れちまった。」

「お、おい。なんだあの戦闘力は、測定不能だと？」
（こんなものか、あんまり上げすぎるとフリーザたちが警戒してナメック星にこないかもしれないからな。ち、意外と難しいものだな。気を高めたふりをするのは。）
「どうだ。これで貴様たちも終わりだ。全員でかかってくるんだな！」
「く・・・。どうするピッコロ？」
「やるしかあるまい。行くぞ！お前たち!!」
「「「おう!!」」」
　ピッコロたちがベジータに攻撃を仕掛ける。
「ふん、その程度では俺を倒すことなんぞできないぞ！」
「く、舐めるな、行くぞクリリン！」
「かめはめ波!!」
「俺たちも合わせるぞ、餃子！」
「どどん波!!」
「魔閃光!!」
「ち、俺も始末する気か！サタデークラッシュ!!」
「死にたくなければお前も手伝え！魔貫光殺砲　！」
　ピッコロたちがそれぞれ技を放つ。

「ふん、その程度、蹴散らしてやる。ギャリック砲!!」

激しい打ち合いが始まるが、ピッコロたちが徐々に押されていく。

「ははは!その程度か。これで終わりにしてやる!!」

更にベジータが気を高め、ピッコロたちは競り負けてしまう。

「「ぐわーーー!!」」

ピッコロたちが周囲に吹き飛ばされる。

「・・・どうやらまだ息があるようだな。」

(あ、危なかった、少し気を高めすぎたか?)

「く、なんて力だ・・・。」

(ベジータ、もう少し手加減しろ!餃子はマジで死にかけてるぞ!!)

「ふん、貴様たちに更に絶望を見せてやる。」

(す、すまん・・・。どうも匙加減が難しくてな。仕方ない少し早いがスーパーサイヤ人になるぞ?)

「絶望だと?」

(そうしろ、多少無茶苦茶だが、ここまで追い詰められれば孫も登場しやすいだろう。)

「俺達サイヤ人はな。大猿になると更に力を増すことができる。だが、それだけじゃない。俺はあの伝説のスーパーサイヤ人になれるんだ。」
「な、なにー!ベジータ。マジかよ?
お前いつのまに?」
「スーパーサイヤ人だと、あれは伝説の存在だぞ?いや、だからこそ、この強さだったのか。くそ、どれだけ強いんだ。ベジータは!」
驚くナッパとラディッツ
そしてベジータがスーパーサイヤ人に変身する。
「お、おお。それが伝説のスーパーサイヤ人か。
ベジータ。これならあのフリーザにも勝てるんじゃないのか?」
「ふん、当たり前だ。だが、その前に。
ようやくお出ましか。貴様がカカロットだな?」
「な、なに!?」
ナッパが振り返るとそこに悟空が立っていた。
「・・・ああ、おめーたちが兄ちゃんの仲間だな。
みんな、ここからはオラが相手をする。あぶねーから避難しててくれ!」
悟空はピッコロに仙豆を渡す。

「ピッコロ。こいつでみんなの傷をなおしてやってくれ。
　あいつはオラが戦う！はあーー!!」
　悟空もスーパーサイヤ人に変身する。
「な、カカロットもスーパーサイヤ人に変身しやがった。」
「面白い、そうでなくてはな。
　・・・さて、ナッパ貴様も邪魔だ。死にたくなければあそこのナメック星人と一緒に避難していやがれ。」
「え？いや、しかし。敵と仲良く避難はできないだろ？」
「素直に従っていろ。どのみち孫が倒せなければ俺たちにあいつを倒す手段はない。
　それはお前も同じだ。ベジータが負ければお前に勝機はない。
　俺達と一緒に大人しく見ていろ。」
「・・・ちっ。ベジータ勝てよ？」
「ふん、当たり前だ。よし、カカロットついてこい！」
「ああ。」
　悟空とベジータが移動を始める。
　その二人を見送りピッコロがつぶやく。
「あとは頼んだぞ。孫・・・。」

（やりすぎるなよ。二人とも！）

悟空ＶＳベジータ

「さて、この辺でいいだろう。」
　ベジータと悟空が近場に降りる。
「よし、そんじゃはじめっか。ベジータ。」
「ああ。分かってると思うが適当なところで切り上げるからな。
　とはいえ、多少怪我をしなくてはならないからな。支障のない範囲でお互いボロボロになるぞ。」
「分かった。で、スーパーサイヤ人のままでやるんか？」
「そうだな。無理に変身する必要はないが、中途半端だと傷もつかんしな。
　カカロット、この半年で貴様がどれだけ強くなったか見てやる。」
　ベジータがスーパーサイヤ人ブルーに変身する。
「へへへ、いいぞ。じゃあ、本気でやろうぜ！」
　悟空も変身し、お互い構えを取る。
「はあーーー!!」
　そして、悟空とベジータの戦いが始まる。

「ふん、その程度か？カカロット!!」
「まだまだ！おめーだって全然本気じゃねーだろ？」
「ふん、ならこれでどうだ!!」
ベジータが更に気を高める。
「ブルー２ってとこか？ならオラはこいつだ!!」
悟空も界王拳を使い気を高める。
「はあーー!!」
再び激突を始め、しばらくたちベジータが口を開く。
「そういえば、身勝手の極意はどうした？まだ使いこなせていないのか？」
「そうだな・・・。あれは消費が激しいからあんまならないんだけどな。
ふう・・・。」
悟空が目を閉じ、集中する。
そして、スーッと目を開き銀色の気で体を包み込む。
「そいつは未完成な身勝手な極意だろ？」
「今のオラにはこの状態がやっとだ。
でも近いうちに完成させて見せるけどな。」
「ふん、まあいい。それじゃ始めるか。」

「ああ。」
　ベジータが攻撃をするが悟空はそれを躱し反撃する。
「ち、厄介な。だが!!」
　更に気を高めたベジータが悟空に突撃する。
「!」
　悟空のカウンターを食らいながらベジータが反撃する。
「くっ!」
「ふん、やっぱりな。ジレンの時と同じだ。食らうのを前提に攻撃すれば身勝手の極意でも恐れることはない!」
「やるなー。ベジータ。でもオラも負けねーからな!!」
　そして戦いを始め３０分が経過していく。
「はぁはぁ・・・。よし、このくらいでいいだろう。」
「はぁはぁ・・・。そうだな。流石にオラもきついぞ。」
　戦いでボロボロになった二人にピッコロたちが近づいてくる。
「随分と派手にやったな。その様子だと引き分けといったところか?」
「ち、俺が勝つつもりだったんだがな。仕方ない。
　おい、ナッパ。今回は引くぞ。」

「ああ、大丈夫かベジータ。
しかしカカロットのやつ、随分と強くなってるみたいだな。
お前がそんなになるとはな・・・。しかし、伝説のスーパーサイヤ人が二人もいるとは・・・。こりゃ、俺達、サイヤ人の未来も明るいかもな。」
「ふん、俺の弟だ。こんくらいできて当然だな。」
「け、なんでお前が偉そうにしてんだよ。
まあ、お前も強くなってるみたいだしな。で、お前はこのまま地球に残るのか?」
「え?ああ。そうだな。
俺はここで強くなったしな。それに、今更フリーザ軍に戻ろうとも思わん・・・。」
「そうか、なら好きにしろ。行くぞナッパ!」
「ああ。そんじゃ、また来るぜ。ラディッツ、カカロット!」
飛び上がり宇宙ポットに向かうベジータたち。
「な、なあ。ピッコロ。このままあいつら逃がしてもいいのか?」
「見逃してやれ。孫もそれを望んでいるだろう。」
「すまねーな。クリリン。
オラまたあいつと戦いてーからさ。」
「ああ、分かった。まあ、あいつら思ったより悪いやつじゃなかったしな。」

「そうだな。ナッパってやつはどうかしらんが、ベジータの方は俺たちを殺さないようにしてたみたいだしな。」
「ヤムチャのいう通りだな。俺達の力ではあのベジータには太刀打ちできなかったしな。さて、餃子。俺たちも帰ろう。」
「はい。天さん。」
「ふう。じゃ、オラたちも帰るか。あ、みんな。
　わりーんだけど、３日後ぐらいにブルマのとこに集まってくんねーか？」
「ああ、構わないが何かあるのか？」
「ちょっと頼みて―ことがあんだ。じゃ、わりーけど頼んだぞ。」
　悟空はそう告げると瞬間移動で悟飯とラディッツとともにその場から立ち去る。
「一体、どうしたんだ？悟空の奴は・・・。」
「さあ？まあ、それじゃみんな３日後にまた会おう。」
「ピッコロお前はどうするんだ？」
　ヤムチャがピッコロに話しかける。
「・・・俺も行こう。」
「お前、ブルマさんの家知らないだろ？どうやってくるんだ？」
「心配いらん。お前たちの気を探ればいいからな。」

「ああ、なるほど。それじゃ、問題はないか。
正直、今回はお前のおかげで助かったよ。」
「ああ、俺たちも礼を言わせてくれ。」
「ありがとう。ピッコロ」
「ふん。」
ピッコロが照れながらその場から立ち去る。
「ははは、あいつ照れてたな。
それじゃ、みんなまた会いましょう。」
こうしてサイヤ人の襲来は終わりを告げた。
そして3日後、カプセルコーポレーションに一同は集まることになった。

そして、数日後、悟空たちは再びカプセルコーポレーションに集まることになった。

クリリンたちが居なくなったあとの荒野
「ちょ・・・、あいつらおかしいんでねーか？
髪の色が金から青になったり黒になったりしてたがや。
よ、良かったーオレ、参加しなくて・・・。
あんなん参加してたら死んでわ。さっさとカリン様んとこ帰ろー。」
ヤジロベーがコソコソとカリン塔へ向かって歩き始めた。

傍観する者たち

トキトキ都にて

「ふむ。あのベジータというサイヤ人もスーパーサイヤ人ゴッドになれるのですか。時の界王神様。彼らはやはり、未来から来たのでしょうか？」

ウイスが小柄女性に向かって話しかける。

この女性がこのトキトキ都にいる刻蔵庫を管理する界王神である。

「ええ。間違いないわ。悟空君たちが本来あの姿になるのは、ビルス様との闘いの時のはずなのに・・・。トランクス、あなたも何か気が付いたことある？」

界王神に質問され、トランクスが答える。

「はい。界王神様、父さん達はこの段階ではまだスーパーサイヤ人にもなれません。確か、最初になったのはフリーザとの闘いの時でした。」

刻蔵庫でウイス、時の界王神、トランクスの３名は時の精霊について調べていた。

そして、その過程で悟空とベジータの戦いを見ていた。

「そうね。でも、刻蔵庫に異常はないのよね。明らかにこれ時の精霊の仕業よね。痕跡も残さずこんなこと普通出来ないし。」

やれやれとため息をつく時の界王神
「時の指輪も増えていませんでしたしね。
さて、この異常事態、どうしたものでしょうか。」
「そうですね。トランクス。あなたのパートナーと一緒に、あらゆる時代に行って時の精霊を探すっていうのはどうかしら?」
「はい。それは構いませんが、時の精霊というのはどのような姿をしているんでしょうか?」
「・・・あー。そうか。人間じゃあれは見つけれないわよね。」
「そうですね。なんせ、形のない存在ですから。概念ともいえるべき存在ですしね。
しかし、器がなければそんなに長く活動できませんから、きっとどこかの時代にいるはずです。それも孫悟空さんの関係者の誰かの近くでその関係者の姿になっている可能性が非常に高いです。」
「そうね。私もそう思うわ。そうだとすると、結構、絞られるかもしれないわね。
少なくても悟空君たちよりあとに記憶の戻った人は関係ないと思うわ。」
「そうなんですか?」
「先ほども言いましたが、器がなければ時の精霊は活動ができないのです。
ですので、そうなってくると、悟空さん、ベジータさん、ピッコロさん、ブルマさん、

チチさんの5名のいずれかが怪しくなってくるでしょう。
記憶の戻り方からして最初に記憶が戻ったブルマさんの時は悟飯さんはまだ生まれてすらいませんから、未来で一緒にいたというビーデルさんという方も除外されるでしょう。
そこから更に絞り込むと、ブルマさんとチチさん、ピッコロさんも違うと思います。」
ウイスの考察に界王神も頷く。
「そうですね。
時の精霊は、存在するために必ず器が必要になるから、強い者に憑依するはず。
万が一倒されちゃったらそこで活動停止になっちゃうからね。
でもそうなると・・・うわー最悪の場合、悟空君とベジータ君のどっちかか。」
「・・・正直、父さんや悟空さんが相手だと俺では厳しいですね。
ですが、おれのパートナーと一緒なら勝てるかもしれません。」
「ほう。例のタイムパトローラーですか。
そういえば、ビルス様相手でもいい勝負をしたそうですね。」
「ええ。でも正直、悟空君たちと戦うならこっちも悟空君たちを呼んでみんなで戦った方がいいかもね。」
「あの二人だと、手を出すなって言って、一人で戦いそうですけどね。」

「まあ、今しばらく様子を見ることにしましょう。
次は、フリーザさんと戦うみたいですし、面白そうですからしばらく様子を見てみるとしましょう。」
「・・・面白そうって。まあ、分かりました。
トランクス、何かあったら呼ぶからあなたは引き続き本来の仕事に戻っていいわ。」
「分かりました。それでは俺はこれで。
失礼します。」
トランクスが刻蔵庫から退出する。
「では、私もこれで。」
「あら?どこに行くの?」
「一度ビルス様のところに戻ります。眠っていらっしゃるとは言え、流石にずっと放置しているわけにはいきませんからね。」
「ああ・・・。ご苦労様。」
「それでは。また。」
ウイスも退出し、刻蔵庫には時の界王神のみが残る。
「・・・え?結局これ私一人で見張らなきゃいけないんじゃ?
しまった。トランクスを呼び戻さなきゃ!!

トランクース!!戻ってきなさーい！」

時の界王神も慌てて刻蔵庫から出て行ってしまった。

???

（ははは、ふふふ、本当に面白くなってきた。んー神や天使すら僕の存在に気付いていない、それにその神と天使を欺き、この娯楽をどこまで続けられるか。逃げ続けることは

簡単だし彼らが僕に気付いた時、彼らはどんな顔をみせてれることやら・・・。
んー、考えただけで楽しくなってきたけど、もっと混沌としたいな・・・。
はぁ、でも力を使ってしまうとばれてしまうだろうし、やめておかないとね。
うん、あくまで今回は傍観者となるべきだろう。色々と楽しめそうだし。
素晴らしい娯楽の提供を期待してるよ、孫悟空。）

惑星フリーザにて

惑星フリーザの一室に、ドドリアは報告書類を見ながら向かう。
「ち、これ本当かよ?」
思わずこぼれてしまった愚痴を同僚のザーボンが聞きとる。
「私も正直信じられない。
だが、この数値は本物だろ。」
ザーボンも書類を目にしながら、ドドリアに話しかける。
「でもよ。あのベジータが戦闘力１０万以上って、ありえなくねーか?」
「お前の気持ちは分かるが、ナッパの奴に仕掛けておいたスカウターの数値は１０万まで計測していたんだ。間違いないだろう。」
二人で話していると目的の部屋の前へと辿り着く。
「・・・さて、入るぞ?」
「ああ。」
ザーボンがドドリアに話しかけ、ドドリアが頷くのを確認すると部屋をノックする。
「フリーザ様、ザーボンとドドリア、入ります。」

ザーボンがそう話すと、部屋の中から声が聞こえる。
「おはいりなさい。お二人とも。」
その声を聴いた二人は中へと入る。
二人が中に入ると、窓に向かって立っている彼らの上司、フリーザが立っていた。
「報告書は確認しましたか？」
「はい。にわかに信じられませんが、あのベジータが戦闘力１０万を超えたとのことです。」
「しかし、この数値、本当に信じていいものですかね？」
ドドリアがいまだ納得がいかないという様子でフリーザに話しかける。
「そうですね。サイヤ人の戦闘力は高くても２～３万程度だと思っていましたが、この数値は正直私も信じられません。
しかし・・・。」
そこまで言うとフリーザは二人に向きなおす。
「この間のアーリア星の件をお二人はご存じでしょうか？」
「はい、あのベジータが殲滅ではなく、服従を強いて、被害を最小限に抑え我が軍の手中に収めた件ですね？」
ザーボンが尋ねるとフリーザが頷く。

「その通りです。ベジータさんらしくないですが、結果、我が軍の技術力はかなり向上しました。

　きっと、侵略中にコツでも掴んだのでしょう。いきなり戦闘力が大幅に上がるとは驚きましたが、その過程で彼に余裕が生まれたとしたら、途中で殲滅から支配に変わってもそう不思議ではないでしょう。」

「フ、フリーザ様は本当にベジータが戦闘力１０万まで上昇しているとお考えなのでしょうか？」

「ホホホ、私はベジータさんの戦闘力が１０万なんて思っていませんよ。」

「そ、そうですよね。あのベジータが１０万だなんて・・・。」

「５０万」

「「え？」」

　フリーザの言葉に二人が驚く。

「少なく見積もっても５０万、そのくらいはあると私は思っています。」

「ご、５０万ですか？」

「ええ。この私に匹敵するほどの戦闘力は持っていると私は思っています。」

「な・・・。フ、フリーザ様に匹敵・・・。」

「ホホホ、これはサイヤ人の扱いについて考えなければなりませんね。

ベジータさんは今、休暇を取り、地球という星に行っているのはご存じですか?」
フリーザの言葉にザーボンが頷く。
「はい。地球という星に、休暇を兼ねてラディッツの奴を迎えに行ったはずです。
確か、カカロットとかいうサイヤ人の生き残りがいて、そいつがラディッツの弟らしいです。」
「そうです。そして今、ベジータさんはこちらに向って帰還しているようですよ。」
「え?ほ、本当だ。あいつ、どうしたんだ?」
スカウターを操作しながらドドリアが驚く。
「まあ、首尾よく、ラディッツさんの弟さんを連れ帰ってくるのでしょうが、そんなことはどうでもいいのですよ。
実は私は地球での彼らの会話を傍受していましてね。そこで面白いことを言っていたのですよ。」
にやりと笑いフリーザが二人に話す。
「なんでも願いを叶える不思議な玉をナメック星人が作れるという話をね。」
「な、なんでもですか?」
「そうです。そんな素敵な物があるなんて思いもよらなかったのですが、これは好機です。あの願いを叶えるね。」

フリーザの言葉に二人が歓喜する。
「それでは、早速ナメック星に向かいますか？」
「ええ。早速、準備をお願いします。準備ができ次第ナメック星に向かいます。
それと、例の準備は抜かりなく進めているんでしょうね？」
「もちろんです。キュイの奴に命令して準備させてます。」
「彼らはライバル同士でしたからね。正直思うところはあるとは思いますが、今回は手を抜かずに進める用に言っておいてください。」
「はい。もちろんです。フリーザ様。それと、ギニュー特戦隊の連中もそれぞれ準備を進めているとのことです。」
「おお、それは素晴らしい。楽しみですね。ベジータさんの驚く顔が・・・。」
「はい。それでは、私はナメック星に向け、移動する準備を進めてきます。」
「俺は、例の件を進めておきます。それと、時間稼ぎも必要ですよね？」
ドドリアの質問にフリーザが考え込む。
「・・・そうですね。
彼の弟に足止めをお願いしましょう。」
「ああ、居ましたね。そんな奴が。
では、それを含めて準備してきます。」

「ええ、お願いします。」
退室していった二人を見送り、再び窓から外の景色を見ながらフリーザがほほ笑む。
「ナメック星・・・。フフフ、年甲斐もなく楽しくなってきましね。」

惑星フリーザにて　その2

フリーザ達が、ナメック星を目指し出発してから数日後、ベジータとナッパが惑星フリーザに到着する。
「ち、フリーザの野郎、もうナメック星に向かっていやがるか。
おい、ナッパ！着替えて飯を食ったらすぐ俺達も後を追うぞ！」
「あ、ああ。
って、お前、フリーザ様にそんな態度取って大丈夫か？」
「問題ない！それより、さっさとしろ！」
苛立つベジータに向かって声をかける人物が現れる。
「兄さん。お久しぶりです。」
「ん？お前は、ターブル？
なんで、お前がここにいるんだ？」
「え？兄さん、聞いていないのですか？
なんでも、フリーザ様が重大発表をするとのことですよ？」
「フリーザが？

なんだ、それは?」
「内容までは聞かされていないのですけど、とりあえず、兄さんに関わることらしく、それで呼ばれてきたのですけど。」
「一体、どういうことだ?
いや、そんなことはどうでもいい。挨拶だけならもういいだろう。俺は急いでフリーザの野郎を追わないといけないんでな。」
立ち去ろうとするベジータに更に声をかける者が現れる。
「おいおい、ベジータ。
ちょっと待ちな。」
「ち、次から次へと・・・。
殺されたくなかったらさっさと消えろ。キュイ!」
「そんな嫌がんなよ。なんだ、ラディッツのやつは一緒じゃないのか。まあいい。それより、こっちだ。ついてこい。」
キュイがそのまま、近くの建物にベジータを誘導する。
「おい、俺は急いでいるんだ。早くしやがれ!」
「まったく、せっかちな奴だ。いいからついてこいって。」
「・・・ち。この忙しい時に。」

仕方なくキュイについていくベジータとナッパ
しばらくすると、更衣室に案内される。
「そこで、その汚い体を洗っておけ、それとその戦闘服も回収するぞ。もうボロボロじゃないか。代わりを持ってきてやるからその間にきれいにしておくんだな。
ナッパ、お前も汗臭いからついでにきれいにしておけ。」
「ん？そうか？」
くんくん、と匂いを嗅ぎ渋い顔をするナッパ
「まあ、どのみち着替える予定だったしな。おい、ナッパ早く入るぞ。」
そういって二人はシャワーを浴び始める。
しばらくして、シャワーを浴び終えた二人に着替えを渡すキウイ。
「ほら、こいつに着替えな。」
「ああ。ん？これは？」
キュイが渡した戦闘服は、かつてベジータ王が着ていたものと同様のものだった。
「なんだこれは？
普通の戦闘服で構わん、それを持ってこい。」
「俺のも、これは側近用の戦闘服だぜ？」
「まあ、そういうなって、これはフリーザ様からお前達にって渡されたんだぜ？」

「フリーザが？」
「フリーザ様だろ？まあ、いい。あとは食事も準備できている。
食べるだろう？ついてこい。」
「・・・ああ。」
キュイが用意した戦闘服に着替えたベジータ達は、キュイの後をついていく。
「おい、一体何を企んでやがる。貴様がこの俺になんでここまでするんだ？」
「・・・ふん。俺だってやりたくてやってるわけじゃねーよ。
だがよ、ライバルの門出を祝ってやるぐらいのことはするさ。」
「ライバル？俺と貴様がか？笑わせやがる。
いや、それより門出とはなんだ？」
「おっと、喋りすぎちまったな。まあ、すぐわかる。
こっちへ来い。」
キウイが再び、ベジータ達を案内すると大きな広場の前で足を止めた。
「おい、ここは宇宙船ドッグへ向かう広場だよな？
なんでこんなところで止まるんだ？」
「フリーザ様を追ってナメック星に行くんだろ？
すでに宇宙船を用意してある。クルーもスタンバイ済みだからさっさと行くんだな。

あ、飯もそこに用意してあるから心配するな。」
「え？あ、ああ。
お前はどうするんだ？」
「俺もあとでお前の弟と一緒にナメック星に行く。
さあ、いいから行けよ。俺はこれでも忙しい身なんでな。」
「ああ・・・。」
（一体、何を考えてるんだ？フリーザの奴も俺が追いかけてくることぐらいは予想していただろうが、なんで、宇宙船まで用意している？）
ベジータが宇宙船に乗り込むと、クルーたちが挨拶をする。
「それでは、早速ナメック星に向かいますが、よろしいでしょうか？」
「ああ、ここからだと1ヶ月ぐらいか？」
「ええ。大体そのくらいで着くと思います。」
「分かった。なら早速向かってくれ。」
「了解しました。」
そして、ベジータとナッパを乗せた宇宙船がナメック星を目指して飛び立つ。
そんなベジータ達を見送りながらキウイは、スカウターを操作する。
「はい。予定通り出発いたしました。

クルーたちにはベジータ達が疑問に思わない程度にゆっくりと向かうよう言ってあります。
はい。我々もこれからナメック星へと向かいます。」
スカウターで誰かに連絡を取るキウイ
「・・・はい。疑問に思いながらも受け取り、着替えました。
大丈夫だと思います。あいつ全く気付いてる様子はなかったですよ。
まあ、所詮サイヤ人・・・え、あ、はい。失礼しました。
では、準備を整えナメック星へと向かいます。」
キュイは連絡を取り終えるとスカウターの操作をやめ、ため息をつく。
「ふう・・・。
いまだに信じられないが、フリーザ様があそこまでするとはね。
あいつ、上手いことやりやがったなー。おっと、急いで準備しねーとフリーザ様に殺されちまうな。」
キュイは急いで、作業へと戻っていった。

カプセルコーポレーションにて

ナメック星へ向かうため、悟空たちはカプセルコーポレーションに集まっていた。
「オラたちが最後か？」
悟空は近くにいたクリリンに話しかける。
「いや、まだ天津飯と餃子がまだだな。」
「そっか。ん？来たみてーだな。」
悟空が上空を見ると、天津飯と餃子が到着する。
「すまない。遅くなったな。」
「いや、オラも今来たところだ。」
「そうか。それで、ナメック星とやらは誰が行くんだ？」
「うーん、今のところオラとピッコロで行こうとは思ってんだけどな。」
「馬鹿言ってるんじゃないわよ。誰が宇宙船を操縦するのよ？
あんた達だけでできるわけないじゃない。」
「ん？ブルマ？」
悟空がそう言うと、奥の部屋からブルマが現れた。

「でもよ。相手はあのフリーザなんだ。あぶねーぞ？」
「大丈夫でしょ？未来ならいざ知らず、この時代のフリーザなんてあんたやベジータがいれば簡単に倒せちゃうでしょ？」
「そうかもしれねーけど、あいつには手下もいっぱい居るんだ。オラたちだけじゃ守り切れねーかも知れねーぞ？」
「え・・・。ま、まあ大丈夫よ。
　手下の相手ぐらいヤムチャやクリリンたちでも大丈夫でしょ？」
「え？俺たちは地球に残るつもりですよ。ブルマさん。」
「はあ？何言ってるの？誰が私を守るのよ！
　あんた達も行くに決まってんでしょうが！」
「いや、そんなこと言われてもな。」
「なあ、そんなに大人数で行けるのか？
　俺達全員だと結構な人数になるけど。」
　ヤムチャがブルマを宥めつつ、話すとブルマが答える。
「大丈夫よ。そのために大型の宇宙船を作ったんだから。
　でもそうね。孫君とピッコロは確定として、あと2～3人程度ってところかしら。」
「それなら、俺が同行しよう。

カカロットとピッコロを除けば俺が一番強いからな。」
そう言ってラディッツが前に出る。
「ふん、ならばあと2人か。
孫、悟飯とクリリン辺りも連れて行けばいいだろう。」
「え?まあ、おめーがそういうんならオラは構わねーけど。
悟飯はチチがなんていうかわかんねーぞ?」
「そうですね。お母さんの許可が貰えるか・・・。」
悟空と悟飯がチラッとチチを見る。
「ん?いいんじゃねーか?
ピッコロもいるし、問題ねーべ。」
「そ、そうか?
じゃ、兄ちゃんと悟飯とクリリンの3人で決まりだな。」
「ピッコロ、悟空さと悟飯ちゃんをよろしく頼んだべ。」
「ああ。任せておけ。」
チチとピッコロのやり取りを見ていた、ヤムチャ達がこそこそと話をする。
「な、なあ。なんでピッコロをあんなに信頼してるんだ?」
「さ、さあ。

確かに昔のピッコロ大魔王の頃よりかは穏やかになってるとは思うけど・・・。」
「不思議だが、今のピッコロなら俺も安心して任せてもいいと思う。」
「僕も天さんと一緒。ピッコロ、昔より穏やかになってる。」
「うーん、不思議だな。まあ、クリリン、頑張ってくれ。」
「はあー、なんで俺なんですかね？
まあ、いいか。それじゃ、ちょっと支度でもしてこようかな。」
そういってクリリンがその場を離れる。
「悟飯、おめーも支度を済ませてこい。オラたちは特にねーからこのまま宇宙船で待っておくぞ。」
「はい、分かりました。」
悟飯も支度のためその場から離れると、突如悟空を呼ぶ声が聞こえた。
『悟空、悟空よ・・・。
聞えておるか？』
「ん？界王様？
ああ、聞こえてるぞ。なんか用か？」
『大変なことになった。クラッシャー軍団という非常に厄介な宇宙のならず者たちが地球に向かっておることがわかったのだ。』

「クラッシャー軍団？
　なんだそれ？」
　悟空の一言にラディッツが反応する。
「クラッシャー軍団だと？
　ばかな、連中がこの近くにいるのか？」
「ん？兄ちゃん知ってんのか？」
「ああ、連中はかなり強い。正直、カカロット、貴様でも勝てるかわからんぞ？」
「そうなんか？」
『うむ。あ奴らは神精樹という樹からできる実を食べて強大な力を手に入れておる。
　今回、地球に目を付けたようだ。』
「んー、どうすっかな。オラたちこれからフリーザの奴を倒しに行くんだけど、その後じゃダメなんか？」
『ばっかもーん！フリーザに勝てるわけないじゃろうが！
　そもそもナメック星に着くころには地球にやってくるんじゃぞ？
　仮にフリーザに勝てても間に合わんぞ。』
「そんなこと言われてもよー。」
「孫、俺と悟飯、クリリンとブルマの４人でナメック星に向かおう。

あっちにはベジータもいることだし、問題はないだろう。」
「んー、でもオラ、フリーザと戦いてーしよ。」
「はあ、お前には瞬間移動があるだろう？
そのクラッシャー軍団とやらを退治してからくればいいだろう。」
「お、そうか。
流石ピッコロ頭いいな。」
「ふん、お前が考えなしなだけだ。
おい、ラディッツ。孫だけでは不安だからお前も残ってやれ。」
「ああ、それは構わないが、クラッシャー軍団に俺達だけで勝てるだろうか？」
「そいつとフリーザどちらが強いか知っているか？」
「え？それはフリーザ様だろ。
奴らはフリーザ様から逃げるように宇宙を荒らしまわっているからな。」
「ふん、なら問題あるまい。孫、地球は頼んだぞ。」
「ああ、任せてくれ。
そんじゃ、界王様。
地球はオラたちが守ってみせっぞ！」
『うむ、任せたぞ。』

こうして悟空たちはそれぞれ準備を始めていく。
そして、しばらくしてナメック星へ向けて宇宙船が飛び立っていった。

地球での戦い

界王から突然の襲撃者の話を受けた悟空たちは、それを迎え撃つためにそれぞれ準備を進めていた。

そして、襲撃者が来る当日

悟空たちは、襲撃者が到着するという場所に集まっていた。

「おーい。悟空。

珍しく早かったな。」

「お、ヤムチャに天津飯、餃子も来てくれたんだな。」

「ああ。どれほどの相手か興味があったからな。

それに、孫。お前がいれば何とかなりそうだしな。」

「んー。どうかな?やってみなきゃわかんないさ。

なあ、兄ちゃん。そいつら強いんだろ?」

「ん?ああ、聞いた話ではあるが、あそこのボスの戦闘力は4万近いと聞いている。」

「よ、4万って、そんなに強いのか。」

「僕たちの約3倍・・・。」

「心配するな餃子、なあ、ラディッツ、そいつ以外はどうなんだ？」
「他もそれなりに強いという噂だが、実際はどうだろうな？」
「まあ、兄ちゃんたちよりかはつえーんだろうけど、オラの敵じゃねーかもな。」
やれやれと少しやる気をなくす悟空を見ながら、ラディッツが話しかける。
「ふん、貴様も多少は強くなったんだろうが、油断しないことだな。
どんな強力な奴かわからんのだからな。」
「そうだぜ、悟空。
ピッコロもいないんだし、俺達だけで勝てるかわかんないぜ？」
「ははは、わりーわりー。さて、そんじゃ、そろそろ着くみてーだし、みんな準備はいいか？」
悟空の問いに頷くヤムチャ達

そしてしばらくして、宇宙船が悟空たちの近くに着陸してきた。
プシューっという音を立てて宇宙船のハッチが開き、中から数人が飛び出してくる。
「ほお？戦闘力が高い人間が何人かいると思ったが、貴様たちか？」
「ふん、どうせ大したことないんだろ？」
「いや、そこにいるサイヤ人は戦闘力1万近いでっせい？」

「はあ？本当かアモンド？うちのボスじゃあるまいしそんな強さのサイヤ人がいるなんて驚きだぜ。」
「ふん、1万程度なんぞ、俺の敵ではないな。
だが、そんなことより、おい、そこの下級戦士のお前。名前は？」
ボスと呼ばれたサイヤ人が悟空に話しかける。
「ん？オラか？
オラは悟空、孫悟空って言うんだ。」
「ソンゴクウ？ん？サイヤ人ではないのか？」
「いや、サイヤ人で間違いない。こいつは地球での暮らしが長いからな。
サイヤ人の名前はカカロットだ。」
「カカロットねー。ふーん。で、そこにいるお前はラディッツ、いや、その戦闘力の高さから言えばナッパの方か？
ベジータ王子のお供で生き残ってたよな。確か？」
「ラディッツだ。
それより、貴様ら地球になんのようだ？」
「そんな怖い顔するなよ。俺たちは数少ないサイヤ人の生き残りなんだ。
仲良くしようぜ？」

「おめー達が、地球に悪さしに来たって言うんは界王様から聞いてっぞ！」
「悪さ？ああ、神精樹のことか？
この星は、いい養分を含んでそうだからな。だが、別にいいだろ？
それで強くなれるんだ。お前たちもどうだ？
この俺、ターレス様についてくればお前達にも神精樹の実を分けてやるぞ？」

「そんなもん要らねーさ。おめー達。わりーことは言わねー。
さっさと地球から出てけ！」
「ふう、俺のやさしさが分からんとは、所詮下級戦士は下級戦士ということか。」
さて、こいつらの戦闘力はどうなってる？」
「ああ、ちょっと待ってくれ。えーっと
左の長髪の男が８０００・・・背の高いハゲが１０５００・・・
小さいハゲが６３００・・・そこのサイヤ人が１５０００で、そこのボスに似ているサイヤ人が２５００だな。おいおい、こいつら結構強いぞ？」
「ふん、数はこっちの方が多いんだ。雑魚を始末してそこの強い連中を始末すれば問題ないだろう。
それにしても、カカロットだったか。情けねーな。あれほど大口叩いておいて２５０

０って、話にならんな。」
　呆れながら悟空を見るターレスに対して悟空はニヤッと笑う。
「どうでもいいけどよ。おめー達、その機械に頼りすぎじゃねーか？
　ま、いいか。そんじゃ、ちょこっとだけ見せてやろうか？オラの力を。」
「ん？何を言って・・・。
　ば、馬鹿な・・・。戦闘力１５０００。２万・・・３万・・・４万・・・まだ上がるだと!?」
「言っとくけどまだまだこんなもんじゃねーぞ。オラの力は。
　わりーこと言わねーから、さっさと地球から出てけ！」
「ふん、面白い・・・。おい、カカロットは俺がやる。
　お前たちは雑魚を始末しておけ！」
　こうして、悟空達とターレス達、クラッシャー軍団との闘いが始まった。

地球での戦い2

悟空とターレスが上空へ飛び上がると、ラディッツ達の戦いも始まった。
「おい、カカロット!どこまで行くつもりだ?」
「・・・そろそろいいかな?」
「ん?」
悟空が停止しターレスに向き合う。
「おい、そこでオラたちを見張ってる奴ら、出てこい!」
悟空がターレスの後ろに向かって話しかける。
「あら?バレちゃったみたいね。」
「そのようだな。どうする?」
ターレスの背後から一組の男女が現れる。
「おめー達何者だ?」
「おい、何の用だ?ここは俺に好き勝手させてくれる約束だろ?」
ターレスが女性に話しかける。
「ええ、そのつもりだったのだけど、バレちゃったしね。

それより、貴方にあげたその神精樹の実はまだ食べてないみたいだけど？」
「ふん、カカロット程度を相手に喰う必要なんてないだろ？」
「あら？それを食べないと勝負にすらならないと思うわよ？」
女性がターレスを挑発する。
「はあ？舐めるなよ？俺様がカカロットより劣ると言いたいのか？」
「ええ。今のままでは負けるわね。それより、ミラ。下の雑魚たちを取り合えず始末してきなさい。」
「いいのか？しばらく手は出さないんじゃなかったのか？」
「そのつもりだったけど、ミラ。下の雑魚たちを掃除しちゃいなさい。」
ミラと呼ばれた男性が、ラディッツ達の方へ向かおうとすると悟空が止める。
「おめーは行かせるわけにはいかねーな。
兄ちゃんたちじゃ、勝ち目なさそうだしな。」
「・・・この時代のお前に興味はない。消えろ。」
ミラが悟空に攻撃を仕掛けると悟空はそれを躱し反撃する。
「む・・・。どういうことだ？
まあ、いい。予想以上に楽しめそうだ。少し真面目にやるとしよう。」
ミラが戦闘力を高めていく。

「な、なんて気だ。ならオラも!!」
　悟空がスーパーサイヤ人に変身する。
「な、なんだそれは。カカロットの奴の変身は一体!?」
「スーパーサイヤ人ね。おかしいわね。この時代ではまだ変身できないんじゃなかったかしら?」
「スーパーサイヤ人だと?あの伝説のスーパーサイヤ人になれるというのか?」
「そうみたいよ。で、貴方はどうするの?このままじゃ確実に負けるわよ?」
「ち、仕方ない。」
　ターレスが懐から神精樹の実を取り出し齧る。
「うおーーー!!」
　ターレスの気が大幅に跳ね上がっていく。
「あのターレスっちゅう奴もとんでもねー気だな。
　でもオラ負けねーぞ!おめー達かかってこい!!」
「仕方ないわね。じゃ、ミラ。孫悟空の相手は任せたわ。
　私が下の雑魚を始末してくるわ。」
「ああ、わかった。」
「ふふふ、カカロット、すぐ楽にしてやるぞ!!」

ミラとターレスが悟空に襲い掛かる。
「く、まずい！兄ちゃんたちがあぶねー！」
悟空がラディッツ達を助けに向かおうとするがミラとターレスの攻撃のせいで援護に向かえないでいた。
そしてそのころ、ラディッツ達はターレスの部下たちと激戦を繰り広げていた。
「俺達、双子の！」
「兄弟さ!!」
レズンとラカセイの双子相手に天津飯とチャオズが戦いを繰り広げている。
「チャオズ、片方を何とか抑え込んでくれ！」
「分かった。天さん！」

そしてその近くでヤムチャとラディッツが戦いを始める。
「操気弾！」
「貴様らの相手は俺だ!!」
ラディッツ達が戦いを繰り広げていると、上空から一人の女性が攻撃を仕掛けてきた。
「貴方達には悪いけど、みんな死んでもらうわ！」

敵ごとまとめて攻撃を受けたラディッツ達は一気に瀕死へ追い込まれていく。
「ば、馬鹿な。なんて力だ・・・。」
「み、味方ごと攻撃しやがった・・・。」
「チャ、チャオズ。まずい、気を失っている。」
「なんで俺たちも、攻撃しやがった。てめー!!」
「ふふ、貴方たちに恨みはないけど、邪魔されると面倒だからこれでおしまいにさせてもらうわね。それに雑魚に興味はないのよ。」
女性がとどめを刺すため、巨大なエネルギー弾を放つ。
「く、ふざけるな!!サタデークラッシュ!!」
「かめはめ波!!」
「ドドン派!!」
ラディッツ達が巨大なエネルギー弾をはじき返すため、それぞれ技を放ち抵抗する。
「おい、貴様もまだ動けるなら手伝え!!」
「ち、仕方ねー。オラ――――!!」
唯一生き残っていたダイーズがラディッツ達に協力しエネルギー弾を放つ。
「く、このままでは押し負ける。」
「くそー!!」

「もう、限界だ・・・。」
「く・・・。」
「あら、頑張るわね。じゃ、追加よ。」
女性が更にエネルギー弾を放つとラディッツ達に向かってゆっくりとエネルギー弾が向かっていく。
そして、ラディッツ達に向かって徐々にエネルギー弾が近づいていきまさに飲み込もうとしたとき、突如横から放たれた別のエネルギー弾がぶつかり爆発した。
その爆発でラディッツ達は気絶してしまったが、女性の方はエネルギー弾が飛んできた方を見て苛立つ。
「本当にしつこいわね。」
「それはこっちのセリフだ。トワ！」
「今日こそ、あんた達をやっつけてやるんだから！」
「はあ、仕方ないわね。今日はこの辺で撤退しましょう。
ミラ、私は先に帰るわ。貴方も適当なところで引きなさい。」
そういって、トワはその場から姿を消す。
「逃げたか。パンちゃん。君はヤムチャさん達の手当てを。
俺は悟空さんの加勢に向かう。」

「分かったわ。トランクス。悟天おじちゃんもこっちに向かってきているから無理しないでね。」
「ああ、分かってるよ。
よし、行くか！」
トランクスはスーパーサイヤ人に変身すると上空の悟空のところへと飛んで行った。

地球での戦い３

「ん？この気は、トランクスか？」
悟空がターレスとミラを相手にしていると、地上からトランクスが近づいてきていることに気付いた。
「トワは撤退したか。おい、俺たちも引くぞ。」
「ち、俺様の部下もまとめて消しやがって。
あとで落とし前付けてもらうぞ？」
「トワに言え。俺には関係ない。」
「なんだ、もう戦わねーんか？」
悟空が問いかけると、ターレスが答える。
「ふん、俺はお前を始末しても良かったんだけどな。
撤退らしいからな。」
やれやれと、ターレスがミラの後を追う。
「結局、あいつら仲間倒して帰っただけじゃねーか。
オラもっと戦いたかったんだけどな。」

悟空が残念そうにしているとトランクスが現れる。
「悟空さん。無事でしたか。」
「おう、トランクス。オラは大丈夫だ。
それより、兄ちゃんたちを助けてくれてありがとうな。」
「ええ、それは構いませんが父さんはどこにいるんでしょうか？
気を感じられないのですけど。」
「ん？ああ、ベジータなら今頃ナメック星に向かって移動してる頃じゃねーかな？」
「ナメック星？
っということは、フリーザと戦いに行ったんですね。」
「ああ。そうだ。
オラもこれから追いかけようと思ってるとこだ。」
「分かりました。悟空さん、時の精霊の話は天使のウイスさんに聞いたので分かっているのですが、少し確かめさせていただいてもいいですか？」
「ん？オラと戦うってことか？」
「はい。今の悟空さんがどの程度の強さなのか知っておきたいんです。」
「ああ、いいぞ。
そんじゃ、さっそくやるか？」

悟空が構える。
「はい。俺も本気で行きます！」
そういってトランクスが気を高めると赤いオーラに包まれる。
「そいつは、ゴッドか？
おめー、いつの間にスーパーサイヤ人ゴッドになれるようになったんだ？
へへ、それじゃ、オラもおもしれーもんみせてやっぞ！」
悟空が集中すると、青色のオーラも包まれる。
「こいつが、スーパーサイヤ人ゴッドの力を持ったサイヤ人のスーパーサイヤ人だ。」
「流石ですね。では、行きますよ！」
「ああ、行くぞ!!」
悟空とトランクスが戦闘を始める。
「どうした、トランクス！おめーの力はそんなもんか？」
「まだです！はあーー魔閃光!!」
「だりゃーー!!」
トランクスが放った魔閃光を弾く悟空
その間に生まれた時間で距離を稼ぐトランクス
「ギャリック砲!!」

「かめはめ波!!」
悟空とトランクスの技がぶつかり合う。
「「はあー!!」」
しばらくぶつかり合った後、大きな爆発が起こる。
「やるなートランクス。」
「はは、悟空さんも流石ですね。
さて、このくらいでやめましょうか。」
「ああ。」
悟空とトランクスが元の姿に戻り、ゆっくりと地上に降りていく。
そして、地上にいるラディッツ達と合流した。

ナメック星へ

ラディッツ達と合流した悟空は、トワとミラについての説明をトランクス達から受ける。

「へー、あいつらそんなに悪いんか。」

「ええ、ですが驚きました。俺のスーパーサイヤ人ゴッドの更に上があったなんて。」

「ん？オラ前に一度見せてるけど、おめーはオラたちの知っているトランクスとは違うんか？」

「おそらく、それは別の未来の俺ですね。

俺の知っている世界の悟空さんは、スーパーサイヤ人ゴッドではなく、スーパーサイヤ人４に変身しますから。」

「へ？スーパーサイヤ人４？

すげーな。オラ戦って見てーぞ。」

「いずれ機会があるかもしれませんね。それで、こっちの女の子が・・・」

「パンよ。悟空おじいちゃん。」

「へ？おめーがパン？

オラの知ってるパンよりでけーな。」
「おい、カカロット。お前、孫までいるっていうのはおかしくないか？
悟飯はまだ子供だろ？」
「んー、ややっこしいんだけどよ。こいつらは未来からやってきてるんだ。」
「未来・・・。お前とは少し違うのか？」
「ああ、オラの場合だと未来の記憶と強さを持って若返っちまったけど、トランクス達は文字通り未来からやってきてるんだ。」
「悟空さんの言う通りですが、正確に言うともう少し違うんですよ。
俺たちの仕事の詳細は言えませんが、今の俺の中では悟空さんと最後にお会いしたのはセル戦の時ですからね。その後、時の界王神様の元で修業していましたから。
あと悟空さんたちの事情は俺たちも聞いていますが、実際先ほど戦うまでは信じられませんでした。」
「私も遠目で見てたけど、この時代のおじいちゃんはスーパーサイヤ人４にはならないのね。」
「まあ、あの変身はもっと未来での出来事だしね。
今の悟空さんだと、本来スーパーサイヤ人にすらなれないはずなんだけど、そこは時の精霊の仕業なのでそういうものだとしかいえないかな。」

「しかし、悟空に孫までできるとはな。」
「うん、僕も驚いた。」
「なかなか可愛い子じゃないか。これは将来美人になるな。」
「ありがとう。ヤムチャさん。」
「ははは、それはそうと悟空、お前これからナメック星ってところに行くんだろ？」
「ああ、そうするつもりだけど？」
「それで、こいつはどうするつもりだ？」
　ヤムチャが気絶しているダイーズを指さす。
「うん？誰だそいつ？」
「さっきいたターレスってやつの部下だよ。
　一応、成り行きで助かったのがこいつだけなんだけどどうしたものかと思ってな。」
「悪さしねーんならほっといていいんじゃねーか？」
「そうはいかんだろう。カカロット、俺が言うのもあれだが、こいつらは極悪人だぞ？さっさと始末するに限る。」
　そういってラディッツがダイーズに向かってエネルギー弾を放とうとする。
「待て！いくら敵でも身動きできないやつを攻撃するのはどうなんだ？」
「じゃあ、こいつが起きるのを丁寧に待つつもりか？

こいつはお前達よりも強いぞ?」
「こいつが起きて、まだ悪さをするようなら俺とヤムチャで倒す。
それでどうだ?」
「貴様らが?ふん、戦闘力1万にもいかない雑魚でこいつを倒すだと?」
「まあ、一人なら厳しいけどよ。俺と天津飯には必殺技があるからな。」
「ああ。悟空に教えてもらったとっておきがある。さっきは披露することができなかったが、それを使えばこいつぐらいなら勝てるだろう。」
「ほう。それならば構わんが、俺は手伝わんからな。」
「はいはい。わかったよ。それじゃ、悟空、地球は俺たちに任せてくれ。」
「ああ、分かった。そんじゃ、頼んだぞ。みんな。
っで、トランクス、おめー達はどうするんだ?」

「俺たちも一度戻ります。
トワとミラの動きも気になりますから。」
「それじゃ、バイバーイおじいちゃん達」
トランクス達が別れの挨拶をするとその場から消えた。
「よし、そんじゃオラも行ってくる。

後は任せたぞ。」
悟空も瞬間移動で移動を開始した。

そして、後日

目覚めたダイーズとヤムチャ達の激戦が繰り広げられることになるが、それはまた別のお話・・・。

ナメック星その1

「フリーザ様、ナメック星に到着いたしました。」
「ええ。そのようですね。
　さて、早速ナメック星人さん達の場所を探してドラゴンボールについて聞き出しましょうか。」
「はっ。既に場所はある程度特定できております。」
　ザーボンからの報告にフリーザが満足気に頷く。
「素晴らしいですね。ザーボンさん。
　では、早速向かうとしましょう。」
　フリーザの言葉に驚くザーボン
「フリーザ様自らが向かわれるのですか?
　我々にお任せ頂ければ即座にドラゴンボールを入手してきますが?」
「ザーボンさん、行けませんよ。こういったことは、長に立つもの自らが率先して行って見せることこそが大事なのです。
　命令ばかりして部下に任せてばかりでは、部下の信用を無くしてしまいますからね。

それに、ドラゴンボールのような重要な物を扱う以上私自らが動かなくてはならないでしょう。」
「さ、流石はフリーザ様です。そこまで考えが至らず申し訳ありませんでした。」
「ホホホ、構いませんよ。それより、ドドリアさん。例の計画はどうですか？」
フリーザがドドリアに向け話しかけるとドドリアが答える。
「はい。すでに手配は出来ております。
お父上のコルド大王様や、兄上でいらっしゃいますクウラ様の了解も得られております。」
「そうですか。
まあ、パパはいいとして、兄さんは正直どうでもいいんですけどね。
さて、では我々はナメック星人とまずは接触するとしましょうか。」
フリーザの言葉にザーボンが答える。
「では、早速近くのナメック星人のいる場所へご案内いたします。」
「ええ、お願いします。
フフフ・・・。楽しみですね。ナメック星についたベジータさんがどんな顔をするのかが。」
「フフフ、そうですね。きっとベジータの奴は驚きのあまり言葉を失うことでしょう。」

「へへへ、まったくですね。」
「そうですね。フフフ・・・ベジータさんが到着するまであと3日程です。それまでに準備を進めておいてくださいね。ドドリアさん。」
「はい。もちろんです。フリーザ様。
ギニュー隊長達ももうじき到着しますが、彼らも例の準備をするので同行できないと言っておりますが、どういたしますか?」
「ふむ・・・。そちらの準備を進めておいて頂いて構いませんよ。
ナメック星人との交渉は私でやりますからね。」
「分かりました。ギニュー隊長にそう伝えておきます。」
「ええ。お願いします。さて、ザーボンさん。行きますよ。」
「はい。フリーザ様」
こうしてフリーザがお供を引き連れナメック星での活動を開始した。

ナメック星その２

フリーザ達に遅れること数時間・・・
ピッコロ達もナメック星へと到着した。
そして早速、宇宙船から降りて周囲を見渡す一同
「懐かしいな。この星も・・・。」
「うん?ピッコロ。お前、故郷のナメック星を覚えてるのか?」
クリリンの質問にピッコロが答える。
「こ、この星にいると自然と落ち着くんだ。
そ、そんなことよりも、ちっ。もうフリーザの野郎がいるみたいだな。」
「フリーザって、もしかして、今感じ取れるものすごく邪悪な気を持った奴ですか?」
悟飯が恐る恐るピッコロに問いかける。
「ああ、そうだ。お前たちは手を出すなよ。
正直お前たちでは、勝てんからな。」
「ああ、そりゃそうだろうけど。ピッコロ、お前なら勝てるのかよ?」
「ああ、今のフリーザならな。

だが、孫も来るし俺の出番はほとんどないとは思うがな。」
「悟空か。なあ、ピッコロ。あいつでも勝てるか分からないぞ?
この気は今まで感じたことがない気だ。
あのベジータって奴よりも遥かに高いぞ?」
「うん?あ、ああ。まあ、大丈夫だろう。」
(そうか、ベジータは地球ではかなり手加減していたからな。
こいつらがそう思っても仕方ないか・・・。)
「さて、俺は少し行きたいところがある。
お前たちもついてこい。」
「行きたいところですか?」
「ああ。この星の最長老様の元に行く。」
「最長老様?行くのは構わないけどよ。お前、場所分かるのか?」
「ああ。問題ない。とにかくついてこい。この場所からならそう時間はかからないからな。」
「ちょっと、ピッコロ。私はどうするのよ?」
「お前は宇宙船をしまって隠れていろ。」
「はあ?冗談じゃないわよ。私もついていくわ!」

「ついてくるって、ブルマさん。空飛べないじゃないですか?」
「そうですよ。それにかなりヤバい奴らがいるんです。ブルマさんはこの辺で隠れていた方がいいですよ。」
「いやよ!なんで私が一人でこんな危険な場所にいなきゃいけないのよ。
　クリリン!私を抱えて飛びなさい!」
「えー。なんで俺が・・・」
「何よ。文句あるの?」
　キッっとブルマが睨みつける。
「う・・・。わ、分かりましたよ。はあ・・・。」
「やれやれだな。まあ、いい。行くぞ。ついてこい。」
　こうしてピッコロたちは最長老の元へと移動を開始した。

ナメック星のある村

「ん？」
「どうした。ザーボン？」
「いや、やけに高い戦闘力を持った奴らが移動をしているみたいでな。」
「はあ？どれ・・・。
　げ、な、なんだこりゃ。」
　驚くドドリア達にフリーザが尋ねる。
「どうしたんですか？お二人とも。」
「あ、はい。フリーザ様。戦闘力５万程度の奴らが移動をしているのをスカウターが捉えまして・・・。」
「ほう。戦闘力５万ですか・・・。それは素晴らしい戦闘力ですね。
　ですが、たかが５万です。私がいれば問題はないでしょうが、貴方達では確かに少々荷が重そうですね。」
「いかがいたしましょうか？フリーザ様」
「まあ、放っておいてもいいでしょう。邪魔するようなら始末しましょう。
　おっと、これは失礼。つい話し込んでしまいました。それでドラゴンボールはお渡し頂けるんですよね？」
　フリーザが倒れこんでいるナメック星人に話しかける。

「うぅ・・・。つ、強い。」
「無理をしないほうがいいですよ?もう立つこともできないでしょう?」
「ふむ・・・。邪悪な気を放つ者にドラゴンボールを渡したくはないが、お前はこちらの試練を見事に乗り越えた。
　仕方あるまい。約束通りドラゴンボールを渡そう。」
「ふふ・・・結構。それでは、そちらで倒れているナメック星人の方々をメディカルマシーンまで運んで差し上げなさい。」
「「ハッ!!」」
　フリーザに命令され数人の兵士が倒れているナメック星人を運びだす。
「さて、では次に向かいましょうか?」
「はい。ここから南東に戦闘力３００程度の反応を複数探知しました。恐らくここと同じような村があるかと思われます。」
「分かりました。では行きましょうか。
　ベジータさんが到着するまであまり時間もありませんからね。
　それでは、皆さん。ごきげんよう。」
　フリーザが残っているナメック星人にそう言い残すと、その場から移動を開始した。

潜在能力解放

「なあ、ピッコロ。
お前、なんでこの先に最長老様?だっけか。
その人がいることを知っているんだ?」
クリリンがピッコロに質問すると代わりにブルマが答えた。
「種族的に本能で感じ取れるんでしょ。
それより、見えてきたわ。あの建物がそうなんじゃない?」

「ああ、そうだ。あれが最長老様のお住まいだ。
いいか。お前ら。くれぐれも粗相のないようにしろよ。」
「あ、ああ。
で、そこに行ってどうするんだよ?」
「ふ、少し試してみたいことがあってな。
まあ、いいから俺に任せてもらおうか。」
ピッコロ達が最長老の家の前に着くと、中からナメック星人が現れた。

「・・・やってきたか。
　そのうちやってくるとは思っていたが、本当に来るとはな。」
「お、おい。ピッコロ。この人が最長老様か？なんか、お前に似てるな？」
「いや、違う。こいつはネイル。最長老様のお付きだ。」
「え？そ、そうなのか。」
「ピッコロのいう通りだ。それより、ここに来たということは最長老様に御用があってのことだろ？」
「ああ、もう知っているかもしれんが、ここにフリーザ達がやってきている。
　今の俺なら十分に勝てるレベルの相手だが、こいつらだと厳しいからな。最長老様に潜在能力を引き出していただこうと思ってきた。」
「そうか。分かった。最長老様の元に案内しよう。
　ついてこい。」
　ピッコロ達がネイルの後についていくと、最長老の元に案内される。
「ふむ・・・。ネイルから聞いていましたが、本当に現れるとは。
　しかし、ネイルから聞いている話と少し内容が異なっているのですが、貴方達はお気づきでしょうか？」
「どういうこと？」

「どうやら、まだお気づきではないようですので説明していきましょう。
まず、フリーザ一味ですが、貴方達の知識では本来、この星の者を手あたり次第に殺していくのでしたね？」
「そうよ。それで、悟飯君たちがフリーザ達と戦うことになるのよ。」
「ふむ。ネイルも同じようなことを言っていました。
しかし、実際にはフリーザ一味はドラゴンボールこそ狙っていますが、ナメック星人を手あたり次第殺すことはしていないのです。それどころか、きちんと試練をこなしているのですよ。」
「フリーザ達がですか？
一体、どういうことだ？」
「感じ取れる気は邪悪そのものなのですが、しかし、今現在で、死者は出ていないのですよ。」
「・・・確かに妙ね。もしかして私たちが原因かしら？」
「そうかもしれんな。しかし、フリーザを放置しておくわけにもいかないだろう。
同胞達が死んでいないのなら朗報だろう。今のうちにフリーザを俺が殺しておこう。」
「勝てますか？相手はあのフリーザ。貴方は強くなっているようですが、それでもその

差は・・・
ふむ。どうやら皆さんはまだ潜在的に力を秘めているようですね。
私がその力を引き出して差し上げましょう。」
「はい。お願いします。では、まずは悟飯。お前からやってもらえ。」
「え?あ、はい。
えっと、お願いします。」
「ははは、そう緊張しなくてもいいですよ。
では失礼して。」
最長老がそう言って、悟飯の頭に手を置く。
すると、悟飯の力が引き出されていく。
「え?あ、あれ?最長老様?え?え?
ここは・・・。え?ん?どうして?」
「お、おい。悟飯、お前どうしたんだ?」
クリリンが慌てて話しかけると、悟飯が答える。
「えっと、クリリンさん・・・。あ、いえ。何でもないです。
えっと、すみません。あの変なことを聞くのですけど、ここナメック星ですよね?」
「あ、ラッキー。悟飯君も未来の悟飯君になったみたいね。」

「そうだな。ブルマ悟飯の潜在能力の解放が終わったら事情を説明しておいてやってくれ。」
「分かったわ。ちょうど終わったみたいだし、ほら悟飯君、こっちいらっしゃい。」
「え?あ、はい。
・・・これって、確実に父さんのせいだよな。あー、これ母さん滅茶苦茶怒るパターンだな。」
ぶつぶつ言いながら悟飯はブルマについていく。
「な、なあ。悟飯のやつ大丈夫か?」
「問題ない。それよりお前も引き出してもらっておけ。」
「あ、ああ。分かった。」
続いてクリリンが潜在能力を引き出してもらう。
「す、すげー。こんなに気が上がるなんて。」
「さて、それじゃ、フリーザを始末しに行くか。」
ピッコロが移動をしようとするとそれを最長老が止める。
「お待ちを、貴方にもまだ眠っている力があります。それを引き出しておきましょう。」
「俺にも?では、お願いします。」
引き続きピッコロが潜在能力を引き出してもらう。

「こ、これは・・・。すごい。とんでもない力が湧き上がってくる。」
「す、すげーな。ただでさえ強かったピッコロが更に超強化されたじゃないか。」
「それだけではない。さて、ピッコロよ。俺と融合してもらおうか。」
「なに?ありがたい申し出だが、今はそれをする必要はあるまい。」
「俺は本来死ぬはずの者だ。それならばお前のためにこの力を使いたい。
　それに俺がお使いする最長老様の寿命ももう長くはないからな。
　また、こうしてお会いできただけ、俺は満足だ。」
「だが、死なずに済む未来もあるんだ。せっかくだし生きたらどうだ?」
「ふ、未来はお前の記憶を通じてみた。
　せっかくだ。最強のナメック星人になってくれ。」
「・・・分かった。お前の力、ありがたくもらい受けよう。」
　ピッコロは更にネイルと融合する。
「お、おい。な、なんてことだ。
　ピッコロ?なんだよな。その姿一体・・・。」
「これほどとは、素晴らしいですね。その力ぜひ平和のため、役立ててください。」
「はい。最長老様。
　これは予想以上の力を手にしてしまったな。」

「ん？もとに戻ったか。あのごっつい姿のままかと思ったよ。」
「まあ、あとで孫たちに見せるまでは内緒にしておくとするか。お前も言うなよ？
さて、それではフリーザ達のところへ行くぞ。
おい、悟飯、ブルマ。お前たちもいいな？」
「はい。ピッコロさん。
父さんがご迷惑おかけして申し訳ありません。」
「オッケーよ。悟飯君も事情は把握してくれたわ。」
「んー、俺だけ状況が全く分かってないんだけど、もういいか。
今更しな・・・。」
「それでは、このドラゴンボールも持って行きなさい。どうせ、あと数週間で私の命は尽きますから。
貴方達で願いを叶えるといいでしょう。」
「ありがとうございました。最長老様。それでは。」
ピッコロたちは新たな力とドラゴンボールを得て、フリーザ達の元へ向かう。

合流

ピッコロ達のナメック星到着の3時間前、ベジータもナメック星に到着していた。
「到着しました。ベジータ様、ナッパ様」
「ふん、やっとか。
よし、行くぞ。ナッパ。」
「お、おう。
でもよ。本当に王族用の戦闘服着なくて良かったのか？」
「ふん、今更惑星ベジータに未練などない。
それにしても、フリーザの野郎は何を企んでやがる。」
「お、おい。フリーザの前ではちゃんとしてくれよ？」
「知るか。あいつ程度、いつでも始末できる。」
「あ、あのー。本当にナッパ様じゃないですけど、フリーザ様の前ではお願いしますよ？」
「あー、分かった。分かった。とりあえずは、大人しくしてやる。」
兵士に案内されながらベジータ達がフリーザの元へと向かう。

一方、フリーザ達

「フリーザ様、ベジータ様が到着されました。」

「おや、思ったより早かったですね。

困りましたね。まだドラゴンボールを集めきっていなかったのですが、まあ、いいでしょう。」

「ふん、ベジータの奴が我々よりも強いとは信じられないですが、スカウターで奴を計測しても数百程度しか出ていませんし・・・。」

「おや、不満ですか?ザーボンさん。」

「い、いえ、フリーザがお決めになられたのですから。不満などは!」

「ホホホ、構いませんよ。まあ、実際、ベジータさんの戦闘力の上昇は事実です。

それにスカウターの数値で数百しか出ていないと言っていますが、実際コントロールできるようになったんでしょ?

以前低く見積もっていましたが、今ならそうですね。最低３０００万はあると思いますよ。今のベジータさんはね。」

「さ、３０００万ですか?

そ、そんなふざけた数値をベジータがですか?」

「ふふふ、まあ、流石に私の本気には及びませんが、私の第３形態でも苦戦しそうですし

ね。もう少しトレーニングをしておいて良かったかもしれませんね。」
「はあ、確かに今のフリーザ様はそのお姿でも戦闘力５３０万ほど、以前の１０倍の力を手にしていらっしゃいますから、本気を出されればベジータごときに遅れは取らないと思いますが・・・。」
「まあ、１ヶ月程度のトレーニングでしたからね。もっと本気で取り組めば更に強くなれそうでしたが、強くなるために努力するなど私の趣味ではないですからね。
　まあ、ベジータさんの真の力を見てから更にトレーニングするか決めるのもいいでしょう。」
「ん？ベジータが来たようですね。」
　兵士に連れられてベジータが現れる。
「ようこそ、ベジータさん。おや？私が用意した戦闘服はどうしたのですか？」
「あんなもの俺には必要ない。」
「ベジータ貴様！フリーザ様に向かって!!」
　怒り心頭なザーボンをフリーザが止める。
「フフフ、少し強くなったからと言って調子に乗っているんですか？
　まあ、分かりますよ。貴方の気持ちも。
　いきなり圧倒的な力を手にしたら図に乗ってしまうものですしね。」

「ふん、だったらどうする？俺を始末するか？」
「まさか？何を仰っているんですか？
貴重なフリーザ軍の兵士いえ、隊長を始末などしませんよ。
しかし、私はあなたの実力を認めているのですけど、他の者は未だに疑う者も多いのですよ。そこで力を少し見せて頂きたいのですよ。
とは言え、今の貴方のお相手を出来るのは私ぐらいでしょう。」
「ふん、なら最終形態になるんだな。
今の貴様を相手にしたところでつまらんからな。」
「おや、私の最終形態をご存じでしたか。
では、お見せしましょう。ですが、ここでは少々まずいですね。
近くにナメック星人の方々もいらっしゃいますし、少し離れたところへ行きましょうか。」
「ナメック星人だと？貴様が他人を気にするとはどういうことだ？」
「ホホホ、貴重なドラゴンボールを作り出す種族ですよ。丁重にもてなさなければいけないでしょう。
本当ならあなたが到着する前にすべて揃えておきたかったのですが、なかなか試練の突破に苦戦していましてね。まあ、それでもあと1個になりましたがね。」

「な！もうそんなに集めやがったのか。
だが、全部揃ってないなら問題はない。
俺がお前をぶち殺してそれで終わりだ！」
「いや、私を殺すのもなしでお願いしますよ。
あくまでもデモンストレーションですよ？これからするのは。分かってますか？」
「な、なに？
宇宙の帝王、フリーザ様ともあろうものが怖気づいていやがるのか？」
「まあ、そう取っていただいても構いませんよ。
正直、今の貴方は底が見えません。貴方の上司としてはあなたより強い存在でありたいですけどなんですかね。今の貴方は得たいが知れないのですよ。
まるであの破壊神ビルスと対峙している時みたいにね。」
（フリーザの野郎、本能的に何かを感じ取っていやがるのか。
しかし、ナメック星人を殺さずにドラゴンボールを手に入れているとはどういうことだ？
仕方ない、少し様子を見るか。）
「なら、適当なところで切り上げるとしてどこで戦うんだ。」
「そうですね。どこか人のいないところがいいのですが、それだとデモンストレーショ

ンになりませんしね。困りましたね。ん?戦闘力測定不能が二つ・・・。これは一体。」
「この気は悟飯か?それとピッコロか?なんだ、この気は、この短時間で何しやがった?クリリンの奴もかなり気が上がっていやがる。」
「こちらに向かってきているみたいですが、貴方のお知り合いみたいですね。」
「戦闘力測定不能が二つ、１３０万が一つ、あとは3?これは一体・・・」
「な、なんだこいつらは・・・。」
「こんな化け物みたいな奴がナメック星人にいるのか?」
フリーザ達が話していると、そこにピッコロ達が到着した。

怒るフリーザ!

「どうやら間に合ったようだな。」
　ベジータ達の前にピッコロ達が現れると、その中にブルマがいたことに気付いたベジータが怒りを露わにする。
「おい、ピッコロ!なんでブルマを連れてきやがった!」
「ふん、こいつが俺達の言うこと素直に聞くと思うか?
　それならお前が説得してみせろ。」
「ぐ。お、おい。ブルマ!なんでついてきやがった!
　さっさと地球に帰りやがれ!」
「なんでよ?せっかくナメック星に来たんだもの。前回見れなかったフリーザの部下たちも見ておきたいでしょ?」
「お、お前な。こいつらがどれだけ危険か分かっているだろ!」
「あらー。ちゃんと守ってくれるんでしょ。ベジータ。」
　そう言ってブルマがベジータに抱き着く。
「ば、馬鹿野郎!こんなところでくっつくな。」

「いいじゃない。夫婦なんだし。問題ないでしょ。」
ブルマの発言にフリーザ達が驚く。
「な、なんですって?
ちょっと、お待ちなさい。夫婦・・・だと?」
わなわなと怒りに震えるフリーザ
「ベジータ貴様・・・!!
な、なんてことだ・・・!!」
「ち、俺がこいつと夫婦であることが貴様に何か不都合でもあるっていうのか?」
「不都合でもあるかだと・・・!!
大ありに決まってるでしょ!!」
フリーザが叫ぶ
「初めてですよ。
私をここまでコケにしたおバカさんは・・・。
許さん、許さんぞ!ベジータ!!」
「な、なんで貴様が切れていやがる!」
フリーザの妙な気迫に押され、少し後退するベジータ
「ザーボンさん!!」

「はっ!直ちに処理します!」
　そう言ってザーボンが宇宙船に向かって移動を始める。
「何をする気だ!フリーザ!!」
　フリーザに対して身構えるベジータ
「何をする気だと?貴様・・・自分が何をしでかしたか分かっていないようだな?」
「なんだと?」
「ところで、ブルマさんとおっしゃいましたね。貴女、式は挙げられたのですか?」
「へ、いや。そういうのはやってないけど。」
「な!いけません、いけませんよ!
　く、私という上司がいながらこの体たらく・・・。
　しかし、今ならまだ間に合いますね。ドドリアさん!聞いていましたね?」
　通信でドドリアに指示をだすフリーザ
「えっと、なにこれ?」
「俺が知るか。おい、フリーザ質問に答えやがれ!」
「はあ。これだから戦うだけしか能がないサイヤ人は・・・。
　最近の貴方は変わってきたと思っていたのですけど、そういうところはやっぱりサイヤ人ですね。

いいですか！籍を入れたならきちんと申請しなくてはダメじゃないですか！
一体、いつから籍を入れていたのやら・・・。
ナッパさん！貴方も貴方です！なぜ、私に報告しなかったのですか！」
「え？いや、俺も今、知ったばかりなんで、何が何やら・・・。」
「もしや、私にサプライズで報告するつもりだったのですか！
フフフ、それはそれは・・・。そうですか。それならば仕方ありませんね。
まさか、貴方を驚かすつもりでいた私が、逆に驚かされるとは・・・。」
「おい、一体何を勘違いして・・・。」
「ねえ。もう面倒だしそう言うことにしておきなさいよ。」
コソコソとブルマが話しかける。
「お前なー。誰のせいでこうなったと・・・。
で、フリーザ、俺と戦うんだろう？さっさと始めるぞ！」
「馬鹿を言わないでください。その前に手続きをきちんと済ませてからです！
まったく貴方という人は！ほら、ザーボンさんが書類を持って帰ってきましたよ。ここですぐ済ませておしましなさい。」
「こっちだ。ベジータ。
ほら、この見本を見てさっさと記入しろ。あとはこっちで処理しておいてやる。」

「・・・なんで俺がこんなことを。」
ベジータがザーボンと話している間にフリーザとブルマがこそこそと話をしていた。
「え、そうなの?
そう言うことなら私は構わないけど、それなら地球にいるパパたちも呼びたいわね。」
「地球ですか。それだとここからはかなり遠いですね。早くても、1ヶ月以上かかりそうです。」
「孫君が来れば瞬間移動ですぐなんだけどね。」
「孫君?」
「孫悟空よ。ベジータと一緒でサイヤ人の生き残りなのよ。で、孫君なら瞬間移動が使えるからすぐ来れるんだけど、問題はいつ来るかなのよね。」
「ほう。便利な能力をお持ちのようですね。
ん?ベジータさん。書類の方は終わりましたか?」
「・・・ああ。」
「さて、予定が大幅に変わってしまいましたが、最後のドラゴンボールを手に入れるまでまだ時間がかかりそうです。
それに準備もし直さなくてはいけませんし、それまでの余興として戦うというのであればいいでしょう。

せっかくだし貴方のお友達の実力も見ておきましょう。ザーボンさん。ギニュー隊長達をここへ呼んできてください。
それと、アボとカドのお二人もね。」
「は！」
フリーザの命令を受けたザーボンが宇宙船へと向かう。
「さて、それではあのあたりがいいでしょう。着いてきてください。みなさん。」
一同はフリーザの後を追うことになった。

親善試合

「さて、みなさん。揃いましたね。
　あなた方の中には、ベジータさんの実力に疑問を持つ方も多数いると思います。
　そこで、今回、ベジータさんの実力をその目に焼き付けて頂こうと思っています。
　ですが、見ているだけでは面白くないでしょ?そこで、せっかくベジータさんのお友達もいらっしゃっていることですし、親善試合ということで戦って頂こうと思っています。」
「あらー。それは面白そうですね。では、審判は私がやりましょう。」
「!」
　突然現れたウイスに驚く一同
「破壊神ビルスの付き人がこんなところに何をしに?」
「へ?面白そうでしたから見学に来たんです。ビルス様と一緒に。」
「な、なに!ビルスが!?」
「おい、フリーザ呼び捨てか?」
「え、いや。し、失礼しました。で、ですが、なぜ貴方がここに?」

「ふん、別にお前に用があったわけじゃないよ。僕は悟空の奴をぶん殴りに来たんだ。でも、まだ来ていないようだね。」
「そうですね。地球で何やら戦闘をしているみたいですから、終わり次第こちらに来るとは思いますが。」
「ふーん。じゃ、それまでのんびりしていようと思ってたけど、いい機会だ。ベジータ、お前の相手は僕がしてやるよ。」
「な、ビルス様が！」
「お前がどこまで強くなったか、見せてもらおう。」
「おやおや、面白くなってきましたね。では、その他の組み合わせは私の方で決めさせていただきましょうか。
　そうですね。では、クリリンさん対ギニューさんから始めてみましょうか。」
「え？お、俺―!?」
「む。俺が最初か。ふむ。では小僧！さっそく戦おう！」
「く、勝てるかな・・・。」
「クリリンさん、頑張ってください！」
「あ、ああ。」
「フリーザ様！戦いの前に戦いの舞を披露しようと思うのですが構いませんね？」

「いえ・・・。それはまた別の機会に・・・。」
「そうですか。それは残念です。
　では、行ってまいります！」
　クリリンとギニューがそれぞれ戦闘の構えを取る。
「えー、それでは。始め！」
　ウイスの合図でクリリンとギニューが戦いを始める。
「へー。クリリンの奴もやるもんね。」
「そうですね。でも、ギニューもかなりの強さですよ。
　クリリンさんの方が若干押されています。」
「そうだな。だが、焦らず攻めればあいつにも勝機はある。」
「しかし、あの地球人の方。素晴らしい戦闘力ですね。
　あのギニュー隊長を相手にいい勝負をしていますね。」
「はい。戦闘力１３万まで上がるとは驚きです。地球人とはそのように戦闘力の高い一族なのですね。」
「「「ギニュー隊長！頑張れー！！」」」
「クリリン！負けんなー！！」
「カカロット！貴様いつの間に!?」

「オッス。ベジータ、今来たとこだ。
それにしてもなんでビルス様達までいんだ？」
悟空がビルスの方を向くとジト目でやってきたビルスが悟空の頭を殴りつける。
「痛ってーー!!なにすんだ。ビルス様！」
「何するんだって、お前よくそんなこと言えたな!!
時の精霊の封印を勝手に解きやがって!!」
「んなことオラに言われもよ。それにビルス様の言い方が悪かったんじゃねーか。」
「やかましい！面倒なことしやがって。あとでまた説教してやるから覚悟しておけよ！」
「えー。そりゃねーよ。ビルス様」
「む、勝負がついたな。」
「はい。ピッコロさん。
クリリンさんも頑張ってましたが、やはり勝てませんでしたね。」
「はぁはぁ。驚いたぞ地球人。
このギニュー隊長相手にここまで戦えるとは。
地力では貴様の方がやや上だったが、この俺にはスペシャルファイティングポーズがあるからな。これが勝負の差となったわけだ。」

「いや、それは関係ないだろ。まあ。負けちまった俺が言うのも変な話だけどな。」
　倒れるクリリンに手を差し伸べるギニュー
「「「おおー。流石ギニュー隊長だ!!」」」
「ホホホ、素晴らしい戦闘でした。お二人ともご苦労様でした。」
「では、引き続き第2試合、孫悟飯さん対アボさん、カドさん。
　準備をお願いします。」
「む、一対一ではないのか?」
「ええ。それでは勝負になりませんからね。」
「大丈夫ですよ。ピッコロさん。あの二人、それなりに強そうですけど、それでも僕の相手にはなりませんよ。」
「む。それなら構わんが。」
「ハッ!」
　スーパーサイヤ人に変身した悟飯がアボとカドの前に立つ。
「な、なんですか。あれは。」
「スーパーサイヤ人だ。そうか、この時代の君は知らなかったね。」
「ス、スーパーサイヤ人?ビルス様、あの伝説のですか?
　あのような少年が変身するとは・・・。」

「それでは、第２試合、始め――！」

親善試合２

「よろしくお願いします。」
　丁寧にお辞儀をする悟飯
「け、なんで俺たちがこんなガキを相手にしないといけないんだ？」
「見た目以上に強かったりしてな？なんか変身したし。」
「それじゃ、行きますよ！」
　悟飯が攻撃を仕掛けるとあっさりとアボを倒す。
「え？ちょ、え？」
　その様子に驚くカド
「似ている・・・。
　夢で見たサイヤ人の変化・・・あれがスーパーサイヤ人だとすると、私はあの孫悟空というサイヤ人に殺されてしまうということですか。」
「うん？どういうことだい。フリーザ？」
「・・・数年前から妙な夢を見るようになったのです。
　それも妙に生々しく忌々しい夢を・・・。」

「へー。面白そうじゃないか。話してみなよ。」
フリーザは夢で見た内容をビルスに話す。
「ふーん。時の精霊の仕業かな?まあ、フリーザ、お前の夢は大体当たってるよ。
お前は孫悟空に殺される。
まあ、色々あって生き返らせてやるんだけどね。」
「時の精霊・・・あの夢の通りだとすると、あの頃より力を増した私なら孫悟空に勝てるということですよね?」
「いーや、無理だね。今のお前が多少、力を増したところであいつには勝てないよ。」
「それほどまでに強いと言うのですか?」
「ああ。そうだな。今のお前で勝てるとしたら、さっき戦ってたクリリンぐらいだろうな。」
「く・・・」
(・・・どうやらナメック星人達を殺して回らないで良かったようですね。
あの孫悟空という男が夢の通りの人物であるなら、反吐が出るぐらいの善人ですからね。流石にこの星で悪さをしていない私をいきなり殺すなんてことはしないでしょう。
永遠の命は惜しいですが、実力的に劣ってしまっているのであれば叶えたところで無意味でしょう。)

「そこまで！孫悟飯さんの勝ちー。」
「ありがとうございました。」
「・・・」
「まさかあの二人を倒してしまうとは・・・。」
「では、次は孫悟空さん対フリーザさんの試合を始めます。
　お二人は準備なさってください。」
「おー。オラの番か。よし、いっちょやってみっか。」
「おい。待て悟空」
「ん？なんだビルス様？」
「お前、スーパーサイヤ人は禁止な。」
「え？そりゃねーよ。ビルス様。」
「ふん。そうでもしないとすぐ勝っちまうだろうが。それじゃ面白くないんだよ。
　いいか、もしなったらその時点でお前の負けだ。」
「しょうがねーな。まあ、この状態でもなんとかなるか。」
「ほう。この私を相手にずいぶんと余裕を見せてくれますね？」
「まあな。今のおめーだと多分この状態でも余裕だろうしな。」
「ほう。舐めた口を聞いてくれますね。では、これならどうです？」

フリーザが力を開放し一気に最終形態へと変化する。
「へー。思ってたよりつえーな。」
「思ってたより？
すぐ、そんな口が聞けなくなるようにしてあげますよ！」
フリーザが試合開始の合図を待たずに悟空に攻撃を仕掛ける。
「おっと、おい。落ち着けよ。フリーザ。まだ試合は始まってねーぞ。」
「ふん、その余裕いつまで持ちますかね!!」
「ったく、しょうがねー。行くぞ、フリーザ!!」
悟空とフリーザが戦闘を始める。
「やはり、孫には勝てそうにないな。」
「それはそうですよ。ピッコロさん。父さんと今のフリーザじゃあ実力に差がありすぎますよ。」
悟飯とピッコロの会話を聞いていたザーボンが怒りを露にしながら話しかけてくる。
「おい、貴様ら！フリーザ様を愚弄する気か！」
「落ち着け。事実を言っているんだ。
もっともフリーザも修行をすればすぐに孫に追いつくほどの実力を身に着けるだろうがな。」

「ふん。当然だ。フリーザ様は天才なのだからな。」
「しかし、あの孫悟空というサイヤ人に対してフリーザ様の攻撃がまったく当たっていないな。おい、貴様ら。あいつもスーパーサイヤ人なのか？」
「ああ。そうだ。孫もスーパーサイヤ人になれる。この中の面子で言えばあいつが最初にスーパーサイヤ人になったんだ。」
「なんということだ。スーパーサイヤ人というのはあそこまで強いのか。
　ん？だが、それならそこの少年の時みたいに金髪になるのでは・・・」
「え、ああ。父さんはまだスーパーサイヤ人にはなっていませんよ。
　スーパーサイヤ人って言うのはこういうやつです。」
　そういって悟飯がスーパーサイヤ人に変身する。
「その金髪に変化するのがスーパーサイヤ人だとすると、奴はまだスーパーサイヤ人にならずにフリーザ様を圧倒しているということか、なんてやつなんだ。」
「ふん、カカロットのやつ、フリーザを舐めすぎだ。
　完全に遊んでやがる。」
　悟空とフリーザの戦いを見ていたベジータが話す。
「ふん、まあ。あの程度じゃ悟空の相手にはならないだろうね。
　それより、あいつらの戦いが終わったらいよいよ僕と戦うんだ。

つまらない戦いをしたら破壊するぞ？」
「ふん、それこそ余計な心配だ。俺は全力で戦わせてもらう。」
「ほう。楽しみだね。」
そういってビルスが悟空達の戦いに目を向ける。
「はぁはぁ・・・。
くそ、なぜ攻撃が当たらない？
当たりさえすれば、こんなやつ・・・こんなやつ!!」
「ん？それじゃ当ててみっか？」
「舐めるな!!」
フリーザが全力の一撃を悟空にお見舞いする。
「ははは、舐めているからだ。この俺の一撃をまともに食らったんだ。無傷なわけ・・・。」
「ああ、流石に無傷っちゅうわけにはいかなかったな。
おー、いてて・・・。ちょっと擦りむいちまったかな。」
「ば、馬鹿な・・・。」
「やっぱ、今のおめーじゃオラの相手はちょっと無理がある見てーだな。」
「く・・・、今のっとおっしゃいましたね。」
「ああ。信じらんねーかもしれねーけど、未来のおめーはもっとすげー戦士になってる

んだ。
　それこそ、オラやベジータと互角に戦えるぐらいにな。」
「ほう・・・。なるほど、一方的に負けて悔しいですが、ここまで実力に差があるのなら仕方ないでしょう。
　今回は貴方に勝ちを譲りましょう。しかし、次は私が勝たせてもらいますよ?」
「ああ。いつでもかかってこい。オラも修行してもっともっと強くなってるからよ。」
「おや、それでは、フリーザさんが降参したため、孫悟空さんの勝ちー」
「フ、フリーザ様・・・。
　お、お疲れ様です。」
「ふう。やれやれですね。この私がこうも一方的にやられてしまうとは。
　孫悟空・・・夢で見た通りいけ好かない野郎でしたね。ですが、次は私が圧倒させてもらいます。
　ザーボンさん、今回の件が終わったら貴方たちもみっちりとトレーニングをするんですよ?」
「もちろんです。フリーザ様!」
「えー。それでは今回のメインイベント。
　ビルス様対ベジータさんの試合を始めます。」

親善試合3

「さて、それじゃ、かかってきなさい。」
「ああ、行くぞ!!」
ベジータがブルーへと変身する。
「はあー!!」
「ほう。少しはやるようになったね。」
ベジータの猛攻をビルスが難なくかわす。
その様子を見ていたフリーザ達が話し始める。
「な、なんなんですか。あの変身は・・・。
スーパーサイヤ人とは違うのですか?」
「ん?ああ。あれはスーパーサイヤ人ブルーだ。
スーパーサイヤ人ブルーってのはよ。スーパーサイヤ人ゴッドの力を持ったサイヤ人のスーパーサイヤ人でな、長くなるからオラたちはブルーって呼んでんだ。」
「確かに夢で見ました・・・。あの形態。しかし、あなたたちはそれ以上の変身を残していますね?」

「ん？あー、変身っていうかオラの場合技だけどな。
身勝手の極意っていってよー。こいつがなかなか難しいんだけどな。」
「身勝手の極意・・・。では、ベジータさんもその技を使えると？」
「いや、ベジータは使えねーと思うぞ。
その代わりブルーを更に超えた姿に変身できるんだ。」
「ほう・・・。」
（なるほど、夢で見た形態とは少し異なりますが、この孫悟空とベジータはまだ力を増すということですか・・・。
それならば、私もさらにトレーニングを積み重ねる必要がありますね。
夢の通りならば、私はあの二人に圧勝しているはずですし・・・。）
「ほらほら、どうした。ベジータ。そんなものか？」
「ち、舐めるなー!!」
ベジータの拳がビルスを捉え、吹き飛ばす。
「はあー、ダダダダダ!!」
ベジータの連続エネルギー弾がビルスを追撃する。
「この・・・。調子に・・・乗るなよ!!」
ベジータの猛攻を受けたビルスが、イラつき破壊の力を解放する。

「な！」
「お返しだよ！」
ビルスが放った小さなエネルギー弾がベジータを襲う。
「ふん、その程度で!!」
ベジータが弾き返そうとするが、そのエネルギー弾はベジータに近づくと近くで爆発を起こす。
「ぐあーー」
その爆発に巻き込まれベジータが地面にたたきつけられる。
「どうだい？これが破壊神の破壊の力だよ。
身勝手の極意なんかより、ずっとすごいと思わないかい？」
「く・・・。なんて力だ。」
「あら、珍しい。ビルス様が、他人に技を教えるなんて。」
「ふん、まあ、ベジータのほうが破壊の力に適応しそうだからね。
それに、僕は手取り足取り教えるつもりはないよ。
死にたくなければ、みて覚えるんだね。」
そういって、ビルスがベジータを更に追撃する。
「く、このーー!!」

ベジータが反撃するが、ビルスは余裕でかわす。
「ち、身勝手の極意か。
くそったれめ!!」
「まあ、僕はあまり得意なほうではないけどね。
あれは天使が使う技。破壊神の僕が好んで使うような技じゃないよ。
それに破壊の力には限界なんてないからね。
さっき君に放った力のように破壊の力は少しでもあれだけの破壊力がある。
どうだい？素晴らしいと思わないか？」
「その破壊の力は俺に使えるのか？」
「さあね？それは君次第さ。
さて、そろそろこの茶番を終わらせるか。」
そう言ってビルスがブルマに向かってエネルギー弾を放った。
「な！やめろー!!」
そして、ビルスの放ったエネルギー弾がブルマに命中する。
しかし、そこには無傷のブルマが立っていた。
「あーあ。なんでばれたのかしら？
うまく立ち回ってたと思ってのだけど？」

「僕を舐めるなよ。時の精霊。
ブルマの姿になって誤魔化していたようだけど、君、不必要に干渉しすぎたね。
僅かな力だったけど、僕は見逃さなかったよ。」
「あちゃー。せっかく面白くしようとしてフリーザに未来の記憶を見せたのがまずかったみたいね。」
「ウイス！」
「はい！」
ビルスの合図でウイスが動き、すぐさま結界を張る。
「これで逃げることはできませんよ？」
「そうね。困ったわ。もう少し見ておきたかったのだけど、まあ、いいわ。
暇つぶしにはなったしね。
でも、最後にもう一つだけ楽しませてもらえないかしら？」
「何をする気だ？」
「ふふ、私が呼び出す戦士たちとあなた達に戦ってもらうわ。
それに勝てたら時を元に戻してあげる。」
「僕がそれに従う理由があると思うのか？」
「あら、じゃあ、この姿ならどうかしら？」

そういって時の精霊が姿を変えていく。